十和村埋蔵文化財発掘調査報告書第４集

高知県十和村

奈　路　遺　跡

１９９３年３月

高知県十和村教育委員会

高知県十和村

奈　路　遺　跡

1993年3月

高知県十和村教育委員会

奈路遺跡調査区全景

序

奈路遺跡は、昭和43年に中村市の木村剛朗氏（中村市文化財保護審議会委員）により発見された縄文時代の遺物散布地で、四万十川左岸に形成された河岸段丘上標高100m前後に立地する縄文時代と中世の複合遺跡であります。

昭和60年度に農業構造改善事業による圃場整備事業の為、調査を実施しました。当時の調査遺物は、石鏃を主体にスクレイパー、尖頭状石器などが発掘されました。本遺跡は、狩猟の際のキャンプ地であったと推察されています。今回の調査は、村営住宅建設計画がどうしても埋蔵文化財包蔵地である奈路に求めざるを得ない理由から、やむなく発掘調査を実施し記録保存することとなった次第であります。本村は、縄文時代遺跡の宝庫として知られているところでありますが、奈路遺跡は縄文時代早期から認められ、姫島産の黒曜石やサヌカイト製の石鏃があり、九州や瀬戸内との交易があったものと考えられます。中世では中国産の青磁・染付が出土し、また国産の天目茶碗が出土しており奈路地区には有力者層の屋敷があったものと思われます。

この調査報告書が埋蔵文化財への村民の方々の一層の理解を得るためのものであるとともに、今後における学校教育、研究活動など文化財保護の上からも教材として生かされることを願ってやみません。

終わりに、今回の発掘調査に当たって直接調査に携っていただきました松田直則氏をはじめとする高知県教育委員会、そして地元関係者の皆様方に深く感謝しお礼申し上げましてご挨拶と致します。

平成５年３月

十和村教育委員会

教育長　谷　本　芳　清

例　　言

1．本書は，十和村教育委員会が，平成３年度に実施した村営住宅の開発にかかわる奈路遺跡の発掘調査報告書である。

2．奈路遺跡は，高知県幡多郡十和村奈路に所在する。

3．発掘調査は，平成３年10月～12月に実施し平成４年度に整理作業・報告書作成を行った。調査面積は450㎡である。

4．調査は，十和村教育委員会が主体となって行い，発掘調査は松田直則（高知県埋蔵文化財センター調査員）が担当し，事務総括は十和村教育委員会が行った。整理作業・報告書作成業務は埋蔵文化財センターで行った。遺物の写真撮影は，前田光雄（高知県埋蔵文化財センター調査員）の協力を得た。

5．本書の執筆・編集は松田直則が行った。

6．発掘調査においては，十和村文化財審議会，地元関係者に全面的な協力を得た。関係者各位に厚く御礼申し上げたい。報告書作成については，木村剛朗氏（中村市文化財保護審議会委員）に多くの御教示を得た。記して感謝する次第である。

7．報告書作成では下記の方々の協力を得た。

竹村三菜　吉本睦子　大原喜子

8．出土遺物等の資料は，十和村教育委員会が保管している。尚，遺物の注記は91－28ＴＮとしている。

9．付編は，川口新改遺跡の発掘調査の概要である。執筆は濱田佳久（高知県埋蔵文化財センター主任調査員）が行った。

報 告 書 要 約

1．遺 跡 名　奈路遺跡　遺跡番号７-16　510005

2．所 在 地　高知県幡多郡十和村奈路

3．立　　地　四万十川の河岸段丘

4．種　　類　中世　集落跡

5．調査主体　十和村教育委員会

6．調査契機　村営住宅建設の開発

7．調査期間　平成３年11月21日～12月３日

8．調査面積　450㎡

9．検出遺構　掘立柱建物跡２棟　土坑３基　竪穴状遺構１基　ピット

10．出土遺物　石器　コアフレイク　石鏃　石剣　有孔石製品

輸入陶磁器　青磁碗・皿　染付碗・皿

国産陶器　瀬戸・美濃系天目茶碗　備前小壺

11．内容要約　奈路遺跡は，縄文時代と中世の複合遺跡である。四万十川左岸に形成された河岸段丘上の標高100ｍ前後に立地している。今回の発掘調査は，村営の住宅建設に伴うもので450㎡を調査した。遺構は，掘立柱建物跡・土坑・竪穴状遺構を検出したが，これらの遺構はすべて中世と近世の時期である。縄文時代の遺構は検出できなかったが，中世の遺構に混入した状況で石鏃・石剣等が出土している。縄文時代の包含層は，中世から近世の時期にかけて削平を受けている可能性がある。中世の遺構は，掘立柱建物跡・土坑・ピットを検出した。出土遺物も各遺構から，青磁・染付・瀬戸・美濃系陶器・備前焼等が出土している。北幡地域で，16世紀前半代の輸入陶磁器が完形に近い形で出土したのは今回の遺跡が初めてである。奈路地区において，室町時代後半には集落が形成されていたことがわかる。さらに中国産の青磁・染付が出土していることや，国産陶器の中でも天目茶碗が見られる点は，この地域の有力者層の屋敷が存在した可能性も考えられる。長宗我部地検帳では，周囲に山城・屋敷の記載が見当たらないが，分布調査では周囲に宮添城跡・大井川東城跡・大井川城跡等が確認されている。これらの城跡が機能した時期は，長宗我部検地以前であることが確実で，奈路遺跡の出土遺物も16世紀前半代に考えられることから，奈路中世集落とこれら城跡との関連性が強く浮かび上がってくる。北幡地域の山間部で四万十川流域の河岸段丘上に開けた中世社会の様相を理解する上での一資料を今回の調査で提供できた。

本 文 目 次

Ⅰ　調査に至る経過……1

Ⅱ　奈路遺跡と周辺の歴史的環境……2

Ⅲ　調査の概要……5

Ⅳ　検出遺構……7

Ⅴ　出土遺物……13

1　縄文時代及び時期不明の遺物……13
2　中世の遺物……14

Ⅵ　調査のまとめ……16

付　編……33

挿 図 目 次

第１図　十和村位置図……1
第２図　十和村の遺跡分布図……4
第３図　発掘調査区位置図……6
第４図　発掘調査区遺構全体図……8
第５図　ＳＢ１・２実測図……9
第６図　ＳＴ１実測図……10
第７図　ＳＫ１実測図……11
第８図　ＳＫ２・３実測図……12
第９図　縄文時代及び時期不明の遺物……13
第10図　中世の遺物……15
第11図　奈路遺跡周辺の小字図……17

写 真 図 版 目 次

図版１上　奈路遺跡調査前全景（南から）……23
図版１下　奈路遺跡調査前全景（南東から）……23
図版２上　調査区全景（東から）……24
図版２下　遺構検出状況（南から）……24
図版３上　ＳＴ１（南から）……25
図版３下　ＳＴ１完掘状況（南から）……25
図版４上　ＳＫ１完掘状況……26
図版４下　ＳＫ３完掘状況……26
図版５上　ＳＢ１完掘状況（北から）……27
図版５下　ＳＢ２完掘状況（東から）……27
図版６上　ＳＢ及びピット群完掘状況（南から）……28
図版６下　ピット群及びＳＫ２完掘状況（北から）……28
図版７上　ピット内遺物出土状況……29
図版７下　調査風景（東から）……29
図版８　縄文時代及び時期不明の遺物……30
図版９　中世の出土遺物１……31
図版10　中世の出土遺物２……32

Ⅰ　調査に至る経過

十和村は，高知県幡多郡の北部に位置する。奥まった山岳地帯を流れる四万十川上流の河川流域に大正町・十和村・西土佐村とそれぞれの集落が形成されており，北幡地域と呼ばれている。十和村は，四万十川の蛇行が最も著しい所で，村の集落は本支流の段丘に散在している。村の経済は，林業の占める割合が高く，木炭，椎茸の生産が最も多い。奈路遺跡の所在する十和村大井川は村の中央部に位置しており，東から北は昭和，北西は河内に接しておりその境を四万十川が西流している。四万十川の対岸には，国道381号線が通り，昭和との間に抜水橋の昭和大橋で結ばれている。この地区は主に農業地帯であり，大井川の水田面積は村内では他地域に比べて広く村の中では穀倉地帯と呼ばれている。さらに豚・牛の畜産業や養蚕も盛んで，山の斜面を利用して桑園を開墾している。しかし現状の水田は湿田・湧水利用の不規則な圃場であり，面的条件が極めて悪く生産性が低い状況である。北幡と称されるこの地域は，縄文時代の遺跡が多く残存し，十川駄馬崎遺跡等は有名である。奈路遺跡も十和村大井川奈路に所在し，四万十川の左岸に形成する河岸段丘上標高100ｍ前後に立地している。奈路遺跡の発見は，昭和43年木村剛朗氏によって石鏃・スクレイパー等が表採され，縄文時代の遺物散布地として周知される様になった。しかし奈路遺跡の所在する大井川地区は，生産性向上のため再編農業構造改善事業に伴い圃場整備計画が持ち上がり，昭和60年に試掘調査が実施されている。調査の結果縄文土器片が出土したが遺構は検出されず，遺跡に与える影響が軽微であると判断され水路工事等では立会調査が行われた。今回の調査原因は，村営の住宅を建設する計画がされたことである。計画区域は，村道に隣接する約2000㎡の広さで現状は水田となっている。河岸段丘の一段高い部分で前回未試掘調査区域であったため，遺構・遺物の有無を確認するため試掘調査を実施した。その結果計画区域の北半分に中世から近世にかけての遺構・遺物が出土したため，建設計画を進めている十和村と文化財保護部局である村教育委員会及び県文化振興課と協議した結果，本調査を実施し消極的な保存ではあるが記録保存することとなった。調査は，平成３年11月21日から12月３日まで，十和村教育委員会が主体となり実施した。本調査の範囲は450㎡である。

第１図　十和村位置図

Ⅱ　遺跡の位置と歴史的環境

十和村は，高知県西部の山間地域で四万十川の河岸段丘上に集落が形成された村である。村の面積は92％を山林が占めており北は大畑山（796ｍ）・笹平山（1034ｍ），東は大滝山（817ｍ），南は堂が森（856ｍ），西は鷹の巣山（654ｍ）などの山々に囲まれている。全国的にも最後の清流として有名な四万十川は，これらの山々の間を東から西へ蛇行して流れている。北や南の山地から北ノ川や久保川等の支流が四万十川に流れ込み清流となっている。十和村の主な地層は，北部地域は四万十帯の須崎層と南部地域は野々川層よりなっており須崎層に，稀に含化石石灰岩がある。四万十川の穿込蛇行は雄大で，河岸段丘には僅かな耕地が開け集落が形成されている。

四万十川沿岸に縄文時代の遺跡が多く，十川駄場崎遺跡や広瀬遺跡・小野遺跡が残っている。奈路遺跡も同様で大井川の奈路に所在している。十和村の縄文時代の遺跡の特徴は，四万十川本流の河岸段丘沿いに認められることである。本遺跡の所在する大井川奈路は，村のほぼ中央部で国道381号線が走る昭和の集落から，四万十川にかかる昭和大橋を渡り集落が点在する場所である。奈路遺跡は，現在水田化されている所が多いが四万十川の河岸段丘上の標高100ｍの地点に立地している。十和村に所在する遺跡は，縄文時代が中心でその後は中世まで遺跡は確認されておらず今の段階では空白の時期となっている。中世になると山城が構築され始め集落も長宗我部地検帳で確認される。縄文時代では，十川駄場崎遺跡・広瀬遺跡が調査されており四国西南部で山間地域に於ける縄文文化の様相が明らかになりつつある。十川駄場崎遺跡については，今まで４次にわたる発掘調査が行われ縄文草創期から後期の土器・石器が出土しており，さらに３次の調査では草創期から前期にかけての遺構（配石・集石・土坑）が検出され，山間部に於けるオープンサイトの様相を窺うことができる。広瀬遺跡は２次にわたり調査が実施されており，縄文前期広瀬Ｚ式土器，中期前半広瀬Ｃ式土器，後期後半の広瀬上層式土器の標式遺跡となっている。

中世にはいると山城が構築される様になり，村内で15の城跡が確認されている。城跡が確認されたのは岡本邦雄氏が中心となる中世古城址調査団によってである。それによると十和村内の中世城跡は，黒川城跡・南四手城跡・富賀城跡・四手城跡・大井川東城跡・大井川城跡・久保川城跡・宮添城跡・小野城跡・コノ城跡・兵部ケ城跡等が確認されており，その後高知県が実施した遺跡分布調査で地吉城跡・烏城跡・横臼城跡・川津城跡等が追加され確認されている。これら城跡の中で，四手城は土佐古城略史に記載されており十和村では比較的残りの良い城である。中世古城址調査団による測量図によると，詰・ニノ段・三ノ段の曲輪を二重堀切で防御するタイプの城跡で，斜面部には竪堀群が掘削されている。縄張りから類推すると竪堀群の存在から16世紀に機能した可能性のある城跡である。大井川に所在する城跡は，宮添城跡・大井川東城跡・大井川城跡の３城跡が構築されている。奈路遺跡の南側に位置する大井川城跡

の測量図を見ると，尾根を利用して詰から三ノ段まで階段式に連郭の曲輪を配し，両端を一条の堀切で防御する簡単な縄張りである。本遺跡からは，中世の遺物も出土しているがこれらの城跡と何らかの関連があると考えられる。中世城跡の調査が実施されていないこと等不明な点が多いが，中世古城址調査団の地道な研究は大きな資料を残している。

十和村では，県下でも重要な近世の神社跡の発掘調査が実施されている。十和村小野に所在する曽我神社である。曽我神社の詳細は，明治期の大洪水で古文書等流出し不明である。しかし社殿及び棟札によってその勧請は室町時代の文明三年（1471）という事になっている。調査の結果では，神社参道跡や鳥居の亀腹，礎石の建物跡が検出されている。出土遺物は，土師質土器・鉄釘・鍵・寛永通宝・近世陶磁器などがある。曽我神社跡は，縄文土器片や石器剥片も出土しており縄文人が住んだ形跡も認められる。曽我神社の発掘調査は，土佐の近世考古学の出発点として貴重な調査であった。

その他，五輪塔や近世の墓標等が調査されている。五輪塔は，十和村内で11カ所，25基確認されている。これらの五輪塔は風・空輪を一石で作ったものがほとんどで，造立時期はごく一部に室町時代，大半は桃山時代以降のものである。五輪塔は土地の開拓者，有力者など特別な身分の人たちのため建立されたものであり，供養碑的な意味を持ったものと考えられている。十和村内で江戸時代の五輪塔は，3基と数少なくなるが変わりに墓標が普及し，尖頭型類墓標，方形型類墓標が出現し始め中世から近世にかけての変遷を窺うことができる。

十和村内では，縄文時代及び中世・近世の考古学的，歴史民俗的調査が進み村内の歴史的環境がしだいに明らかになりつつある。県内の山間部に於ける歴史は，十和村と同じ様に縄文と中世・近世という時代に絞られるが，空白の弥生から古代の歴史復元が今後の課題と考える。

番号	名称	種別	時代
1	金谷遺跡	集落跡	縄文・中世
2	富貴城跡	城跡	中世
3	四手城跡	〃	〃
4	三島遺跡	散布地	縄文
5	轟遺跡	〃	〃
6	野々川城跡	城跡	中世
7	南四手城跡	〃	〃
8	大井川東城跡	〃	〃
9	岩利遺跡	散布地	縄文
10	大井川城跡	城跡	中世
11	松原遺跡	散布地	縄文・中世
12	宮迫城跡	城跡	中世
13	くぐつけ遺跡	散布地	縄文
14	河内遺跡	〃	縄文・中世
15	久保川城跡	城跡	中世

番号	名称	種別	時代
16	久保川東遺跡	散布地	中世
17	琴平ノ下遺跡	〃	縄文
18	曽我ノ森遺跡	〃	縄文・中世
19	小野遺跡	〃	縄文
20	小野城跡	城跡	中世
21	橋口城跡	〃	〃
22	コノ(龍見)城跡	〃	〃
23	川口新殿遺跡	散布地	縄文
24	十川駄場崎遺跡	〃	〃
25	川口ホリキ遺跡	〃	〃
26	川津城跡	城跡	中世
27	今成遺跡	散布地	縄文
28	上広瀬遺跡	〃	〃
29	広瀬遺跡	〃	〃

第2図　十和村の遺跡分布図

Ⅲ　調査の概要

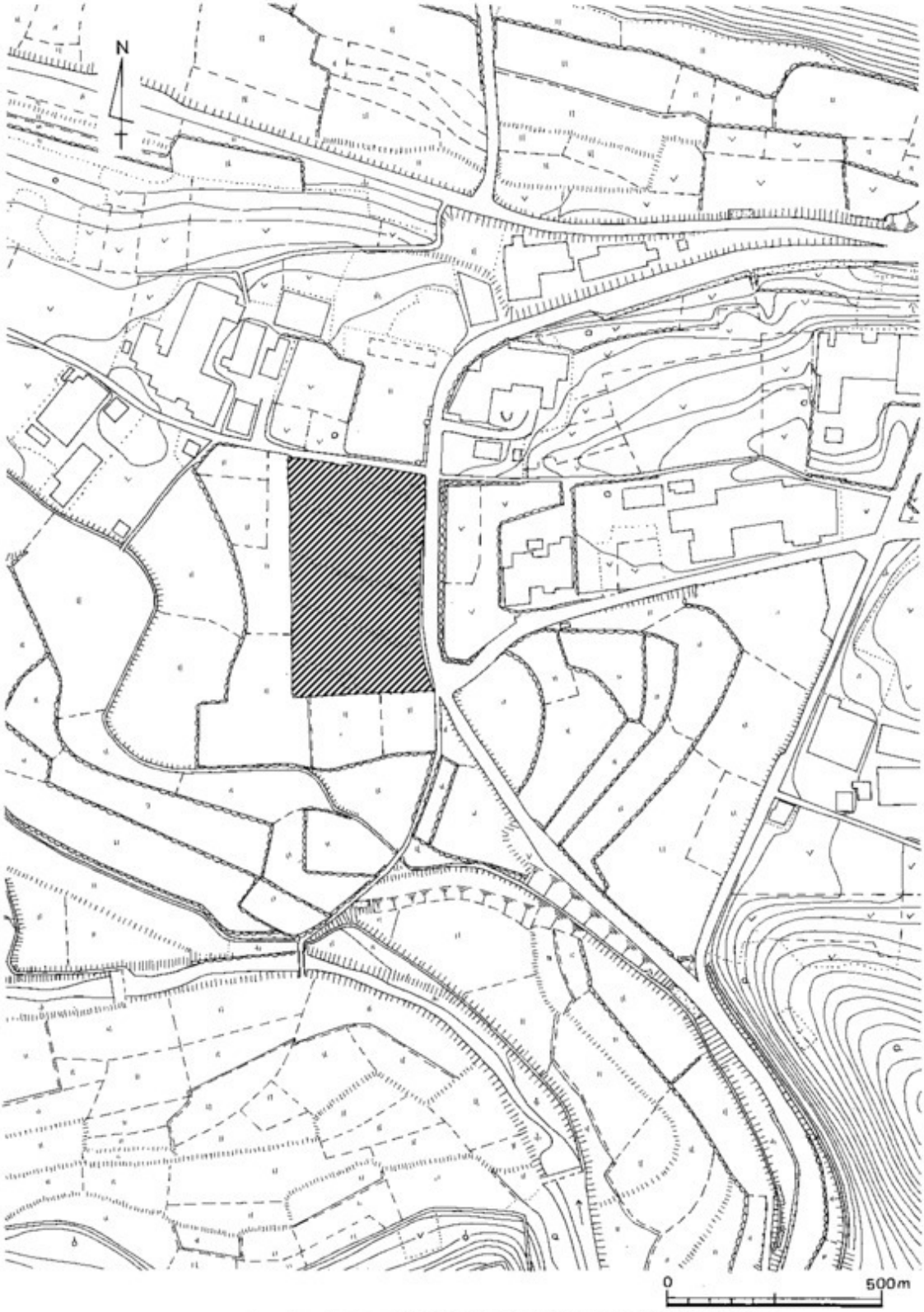
1　調査の方法

奈路遺跡は，河岸段丘上に立地しているがその範囲は明確でない。段丘先端部については昭和60年に試掘調査が実施されているが，今回の村営住宅建設計画範囲については不明であった。現状は，階段状に水田が開けているが，古老の話では昭和の初頭頃水田化するため微高地を削り低い方に土盛りし水田を作ったとのことである。これら古老の話から，奈路遺跡とされる範囲の中で当該建設計画範囲は当時の掘削で消滅している可能性が強いと判断された。しかし遺跡の有無は確認する必要があることから，試掘調査で10カ所のトレンチを計画範囲内に設定し調査を実施した。各トレンチでは，耕作土を除去した段階で地山層を検出し大部分の範囲が削平されている様相であった。調査対象地の南側は全く遺構は検出されず，北側で若干のピットを検出した。この結果建設計画区域の北半分の範囲を，試掘調査に引き続き本調査として全面実施した。

調査方法は，水田化されているため耕作土を除去し遺構検出面である地山を検出した。その後遺構のプランを検出すると共に，測量用に調査区全域を４ｍ方眼に分割し，基準方位をＮ－14°－Ｅとしほぼ地形に沿ってポイントを設定した。４×４ｍの区画は，東西ラインの西から１→２→３とし，南北ラインの北からＡ→Ｂ→Ｃで区分し，北西隅の交点番号でＡ－１・Ａ－２と呼称することにした。調査前の写真撮影及びプラン検出状況の測量図を１／80で作成し，遺構・遺物の検出状況の写真撮影及び平・断面図を１／20で作成した。最後に完掘状況の写真撮影を実施し終了した。

2　調査の概要

検出した遺構は，掘立柱建物跡（ＳＢ）が２棟，土坑（ＳＫ）が３基，竪穴状遺構（ＳＴ）が１基，ピット群である。これら遺構を検出した面はすべて地山である。基本層序として述べる層は堆積しておらず，水田の耕作土（15～20㎝）を除去すると地山である。これらのことは，昭和初期に水田化された時削平されている可能性が強く，今回検出した遺構はすべて上部は削平を受けており残存状況は悪い。さらに遺構はすべて中世と近世の時期であり，縄文時代の遺構は検出できなかった。出土遺物は，縄文時代のものも出土しており，石鏃，石剣，有孔石製品等がある。中世では，輸入陶磁器の青磁，染付，瀬戸・美濃系の天目茶碗，備前焼などが出土した。中世の頃集落が形成された段階で，縄文時代の文化層を削平された可能性が強い。中世では室町時代には集落形成を見ることができ，本遺跡は遺物の天目茶碗などからこの地域の有力者層の屋敷とも考えられる。遺構・遺物の詳細は次章で述べることにする。



第３図　発掘調査区位置図（斜線部分が調査対象範囲で北半分を本調査）

Ⅳ　検出遺構

今回の調査で検出した遺構は，掘立柱建物跡（ＳＢ）２棟，土坑（ＳＫ）３基，竪穴状遺構（ＳＴ）１基，ピット群を検出した。すべて中世から近世の遺構で，遺構の上部は削平されており残存状況は悪い。

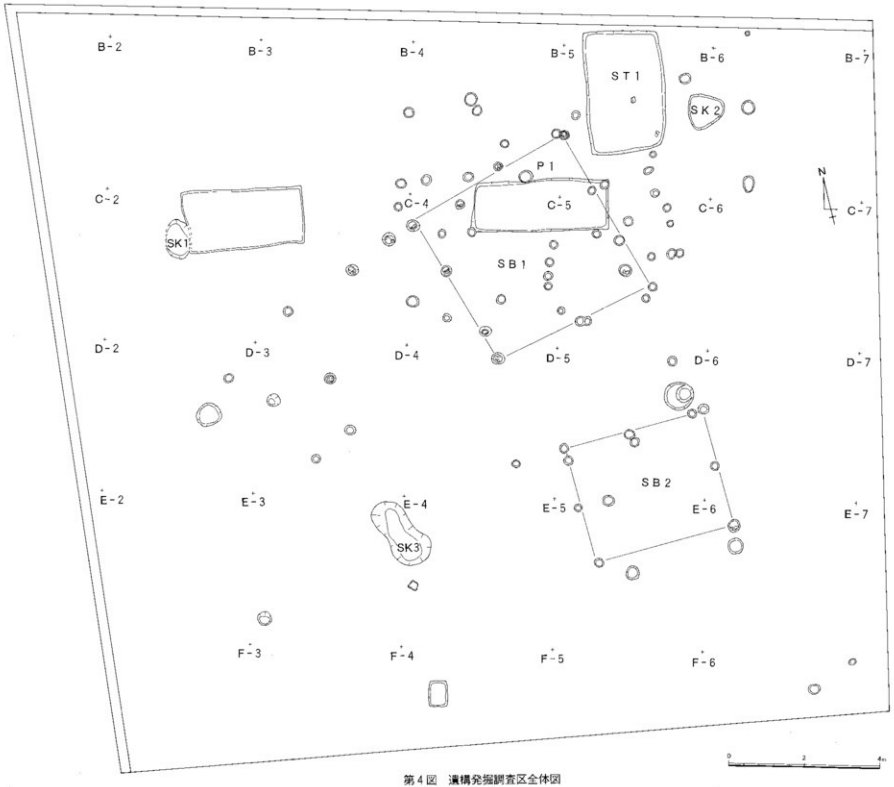
掘立柱建物跡

ＳＢ１

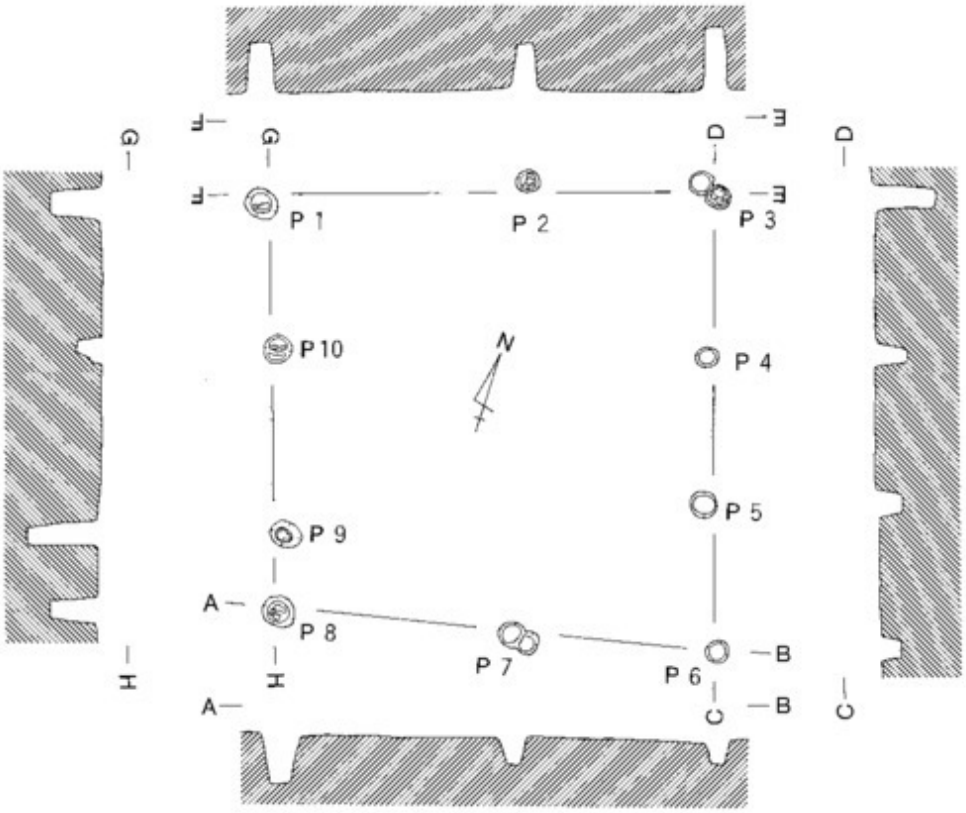
調査区の中央部北側に位置する。Ｂ－４・５区，Ｃ－４・５区にかけて，表土を除去した段階で検出した。建物の規模は，２間×３間で棟方向をＮ－19°－Ｗにとる南北棟である。桁行西側列は4.2ｍで中間寸法はＰ１～Ｐ10が1.5ｍ，Ｐ９～Ｐ10が1.9ｍ，Ｐ８～Ｐ９が0.8ｍを測りまばらである。桁行東側列はＰ３～Ｐ４が1.6ｍ，Ｐ４～Ｐ５が1.55ｍ，Ｐ５～Ｐ６が1.5ｍを測り平均1.55ｍでほぼ均一である。梁間北側列は4.65ｍで中間寸法Ｐ１～Ｐ２が2.75ｍ，Ｐ２～Ｐ３が1.9ｍを測る。梁間南側列は4.55ｍで，中間寸法はＰ６～Ｐ７が2.1ｍ，Ｐ７～Ｐ８が2.45ｍといずれもまばらである。南北棟の建物であるが，規模的には桁行・梁間とも同様な数値を示しており正方形に近い建物である。柱穴の掘り方は円形状を呈し直径25～35㎝を測り，検出面からの深さは25～70㎝と深さに差が認められるが，Ｐ３・Ｐ１などは端柱で深く掘り込まれている。さらにＰ１・Ｐ３・Ｐ８・Ｐ９・Ｐ10には握り拳大の根石が残っている。柱穴底面の標高は，106.30－106.79ｍを測る。埋土は単層の暗茶褐色粘質土（黄色ブロック及び炭化物混入）である。出土遺物は，Ｐ１から第10図７の輸入陶磁器の染付皿，Ｐ８から第10図２の瀬戸・美濃系の天目茶碗と第10図８の輸入陶磁器の染付碗，さらに縄文時代の遺物として第９図２の石鏃が出土している。

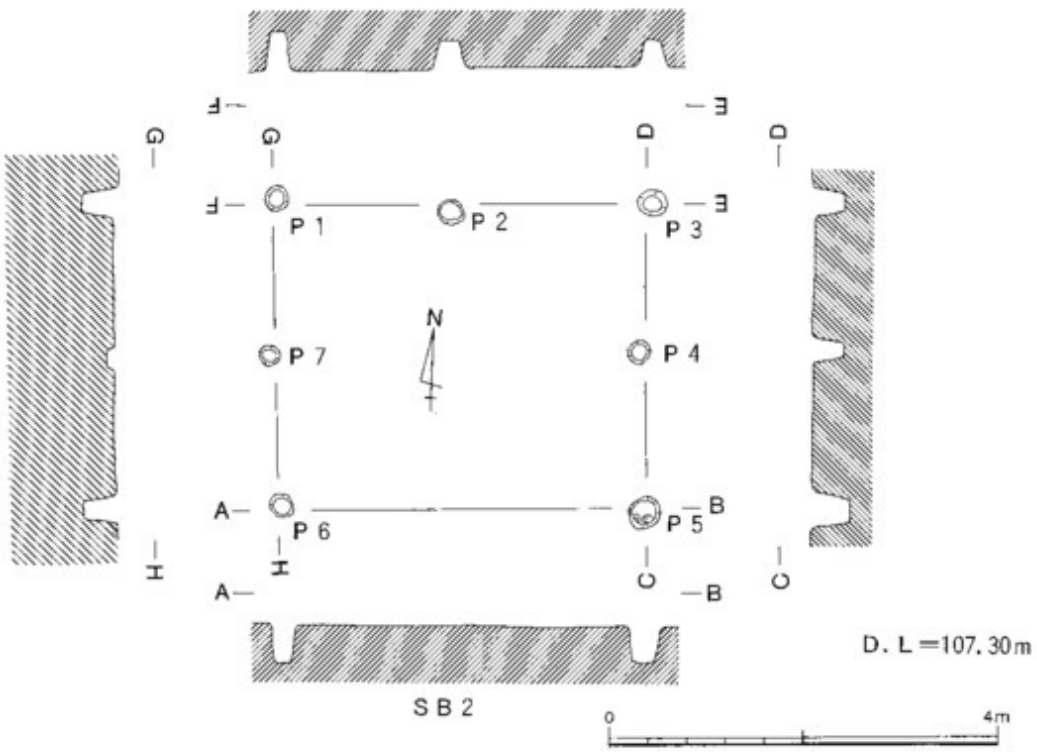
ＳＢ２

調査区の中央部南東側で，ＳＢ１の南側に位置する。Ｄ－５区，Ｅ－５・６区にかけて，表土を除去した段階で検出した。建物の規模は，２間×２間で棟方向をＮ－89°－Ｅにとる東西棟である。桁行北側列は3.8ｍで中間寸法はＰ１～Ｐ２が1.75ｍ，Ｐ２～Ｐ３が2.05ｍを測る。桁行南側列は3.75ｍを測り中間柱穴が欠損している。梁間は東西両側列3.15ｍを測り，西側列の中間寸法はＰ６～Ｐ７が1.55ｍ，Ｐ７～Ｐ１が1.6ｍである。東側列の中間寸法はＰ３～Ｐ４が1.5ｍ，Ｐ４～Ｐ５が1.65ｍでほぼ梁間の中間寸法は均一である。柱穴の掘り方は円形状を呈し，直径20～35㎝を測る。検出面からの深さはＰ７のみ10㎝と浅いが，その他は30～40㎝と均一である。Ｐ５には握り拳大の根石が残る。柱穴底面の標高は，106.56－106.65ｍを測る。埋土は単層の青茶褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。



第4図　遺構発掘調査区全体図


P 1
P 2
P 3
P 4
P 5
P 6
P 7
P 8
P 9
P10
N
SB 1

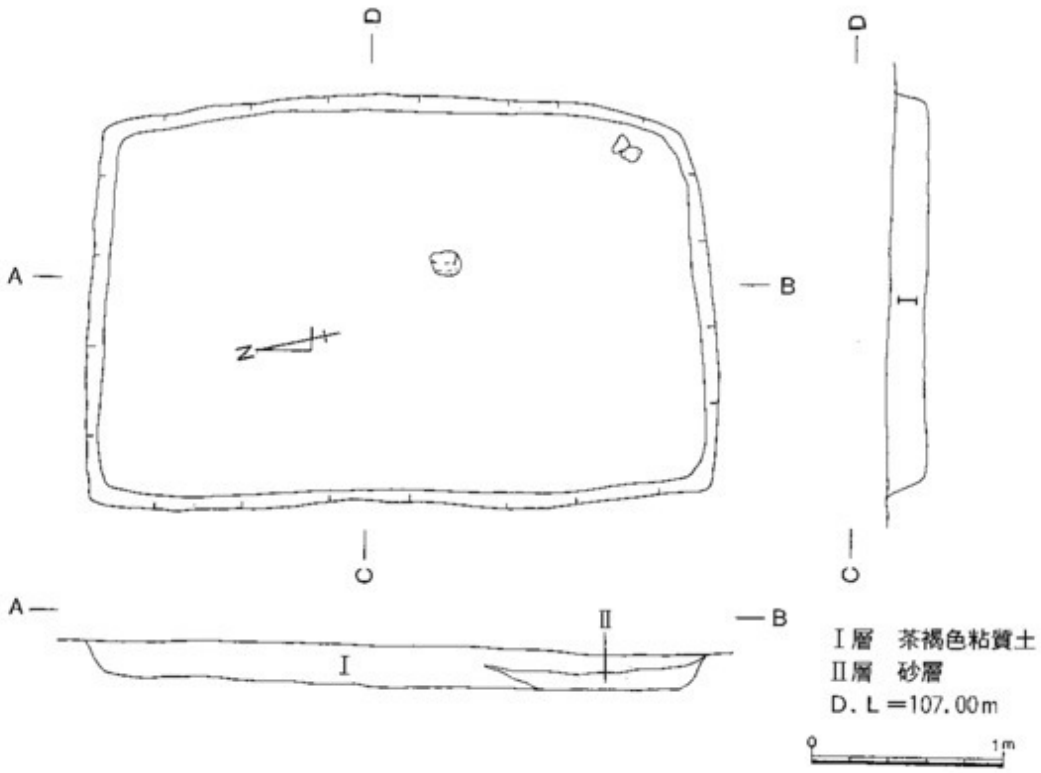

P 1
P 2
P 3
P 4
P 5
P 6
P 7
N
SB 2
D. L＝107.30m
0
4m

第5図　SB1・2実測図

竪穴状遺構

ＳＴ１

調査区北東部で，ＳＢ１の北側に位置する。Ｂ－５区において表土層を除去した段階で検出した。平面形は隅丸長方形を呈し，長軸方向はＮ－13°－Ｅをとる。規模は検出面で長軸長3.2m，短軸長2.1mを測る。深さは検出面から20cmを測り，壁は急傾斜で立ち上がる。底面は水平で標高106.83mを測る。埋土は２層に分割できるがⅠ層は茶褐色粘質土，Ⅱ層は遺構の南部のみに確認でき砂層が流れ込んだ様相で堆積している。本遺構の中央部と南東隅で床面直上から人頭大の自然礫が出土している。出土遺物は，Ⅰ層から近世陶磁器の染付と青磁片が出土しているが細片で実測不可能である。

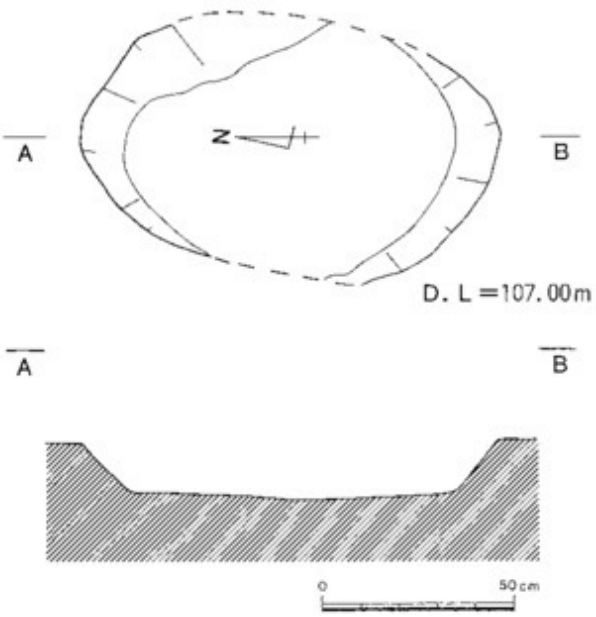


第６図　ＳＴ１実測図

土　坑

ＳＫ１

調査区北西部で，ＳＢ１の西側に位置する。Ｃ－２区において表土層除去後検出した。平面形は楕円形を呈しており，長軸方向は北方向である。規模は検出面で長軸長1.08ｍ，短軸長は試掘トレンチと攪乱で不明であるが，推定で0.65ｍを測る。深さは検出面から15㎝でこの遺構の上部は削平されている。底面は北側がやや深く南側がやや高く，標高は106.61ｍである。壁は北部・南部とも比較的緩やかに立ち上がる。埋土は，Ⅰ層で暗茶褐色粘質土である。出土遺物は，第９図１の黒曜石の剥片が出土している。



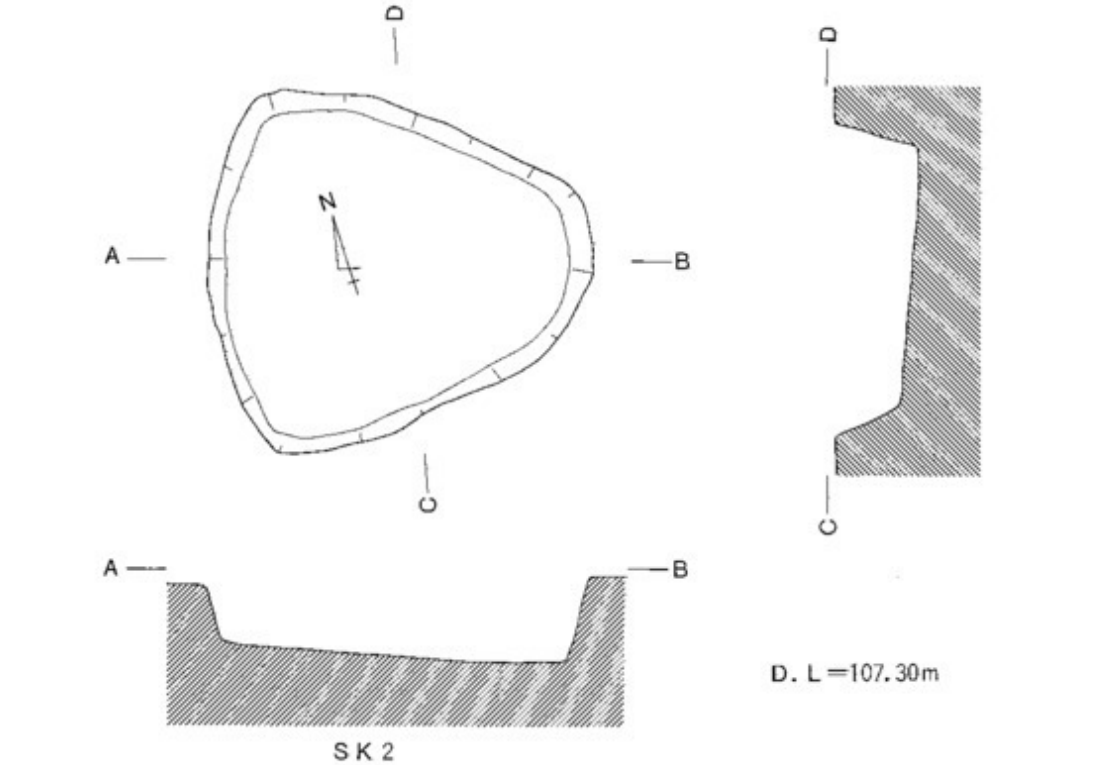
第７図　ＳＫ１実測図

ＳＫ２

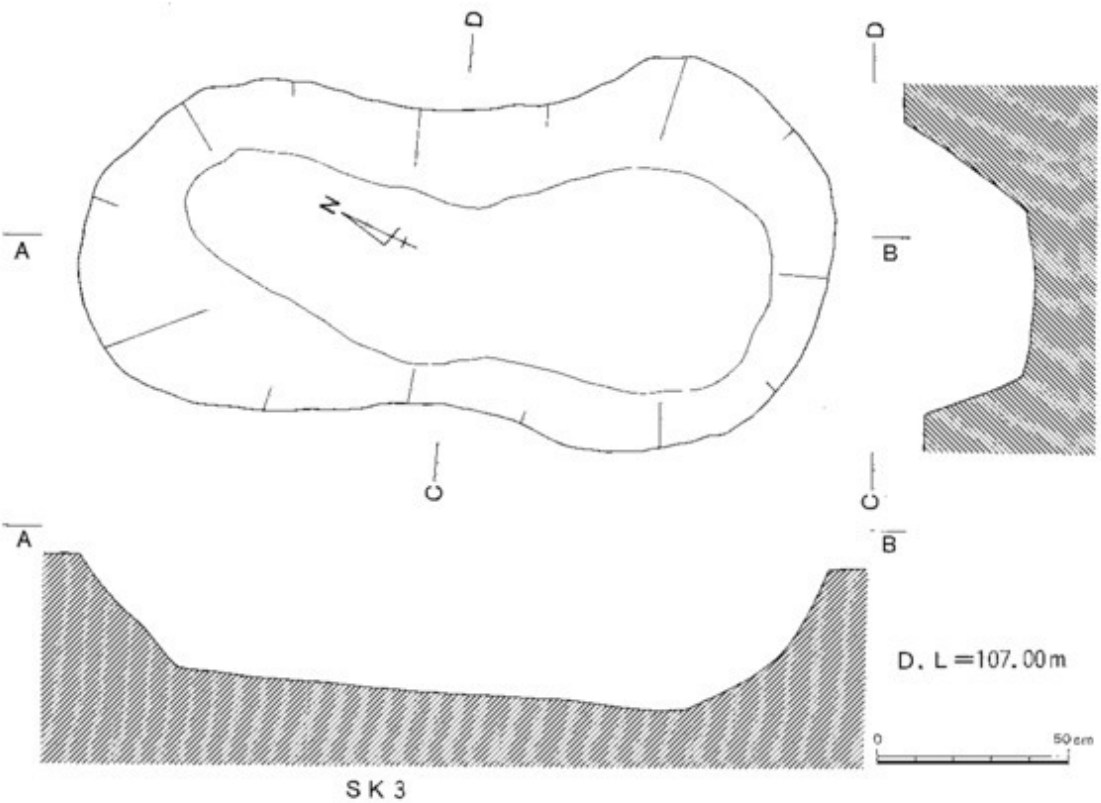
調査区北東部で，ＳＴ１の東側に位置する。Ｂ－５・６区に跨がって表土層除去後検出した。平面形は三角形状の不整形を呈しており，長軸方向は，Ｎ－76°－Ｗをとる。規模は検出面で長軸長0.98ｍ，短軸長は0.77ｍを測る。深さは検出面から15㎝で，この遺構の上部は削平されている。底面は北側がやや深く南側がやや高い。標高は，106.61ｍである。壁は北部・南部とも比較的緩やかに立ち上がる。埋土は，Ⅰ層で暗茶褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＫ３

調査区中央部南西側で，ＳＢ２の西側に位置する。Ｅ－３・４区に跨がって表土層除去後検出した。平面形は瓢箪形を呈しており，長軸方向は，Ｎ－25°－Ｗをとる。規模は検出面で長軸長1.95ｍ，短軸長0.75ｍを測る。深さは検出面から，北部が28㎝，南部が37㎝を測り，底面は北側がやや高く南側に傾斜している。標高は，北側で106.58ｍで南側は106.50ｍを測る。壁は北部・南部では緩やかに立ち上がり，西部・東部では比較的急傾斜で立ち上がる。埋土は，１層で暗茶褐色粘質土である。出土遺物は，縄文時代の遺物として第９図３の石剣と４の有孔石製品，中世の遺物として第10図１の備前焼小壺，５・６の青磁碗が出土している。



SK 2



SK 3

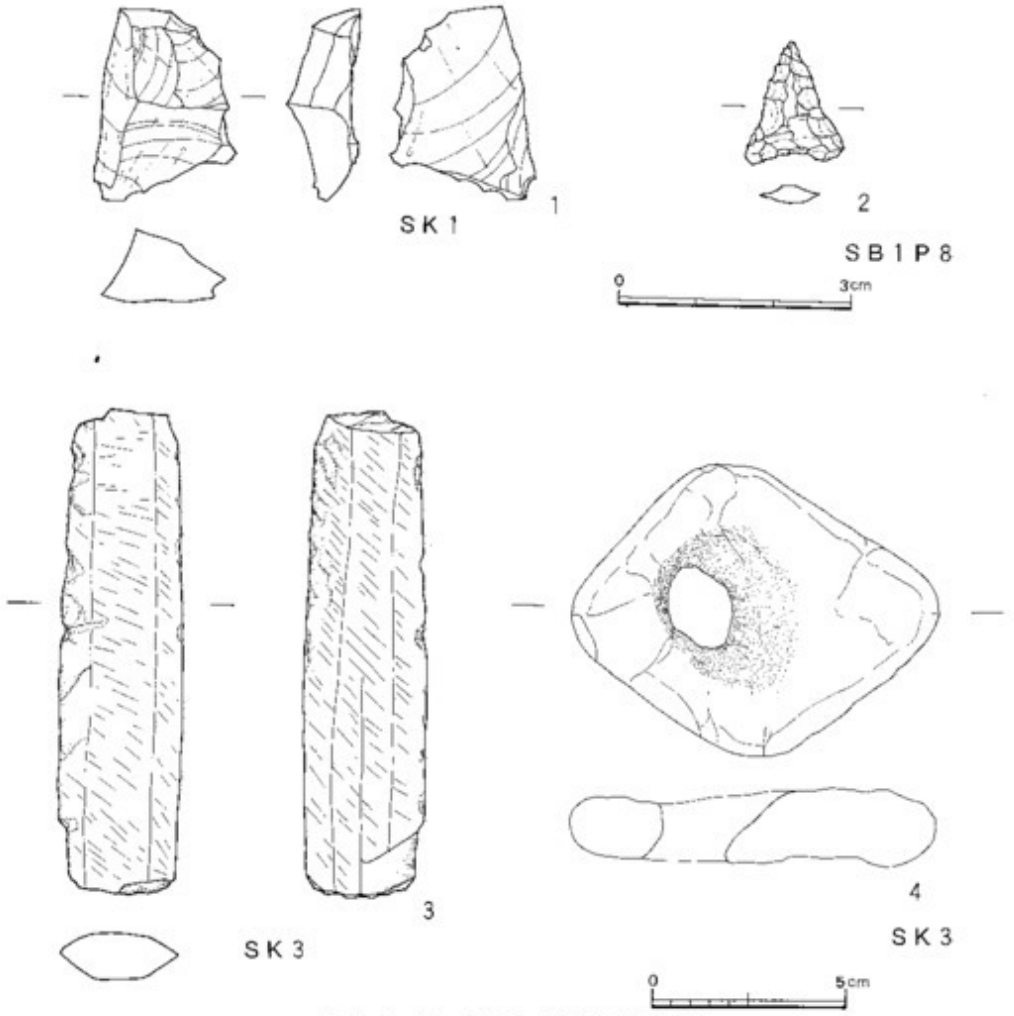
第8図　SK 2・3実測図

Ⅴ　出土遺物

本遺跡からは，縄文時代と中世・近世の遺物が出土している。遺物の量は少ないが，まとまって遺構から出土している。図示できえた遺物は，遺構外から青磁碗が出土しているのみで，その他はそれぞれの遺構からのものである。縄文時代と中世に分けて個々の説明をしていくことにする。

1　縄文時代及び時期不明の遺物（第９図１～４）

１は，ＳＫ１から出土した姫島産黒曜石のコアフレイクである。上端に打面を作り出し，右側縁及び表面を大きく打ち欠く。裏面は大きな剥離面を残す。全長2.4cm，全幅2.0cm，全厚1.0cmで，重量は2.5ｇである。



第９図　縄文時代及び時期不明の遺物

2は，ＳＢ１のＰ８から出土した石鏃である。刃縁がやや内弯気味で，刃角が鋭い。基部の抉は浅く小型の製品である。全長1.6cm，全幅1.3cm，全厚0.2cmで，重量は0.2ｇである。石材は，乳白色を呈する珪質頁岩である。これら珪質頁岩の石鏃は十川駄場崎遺跡等四万十川上流域の縄文時代早期～前期にかけて，比較的多く認められ小型の製品も多い。

3はＳＫ３の埋土から出土した砂岩製の磨製石剣である。両辺部に刃部を作り出している。さらに刃部に打痕を残しており磨きは顕著でない。矩形に近い断面であるが，全体的に丸味を持っている。左側面の刃部は，刃こぼれ状になっており上下端は折損している。全長12.5cm，全幅3.0cm，全厚1.2cmを測る。重量は68.2ｇである。

4はＳＫ３から出土した有孔石製品と考えられるが石器かどうか不明である。形態は隅丸の菱形状を呈し，ほぼ中央部から径２cmの孔が穿たれる。砂岩製で長径9.3cm，短径7.4cm，厚さ２cmを測り，重量134ｇである。

2　中世の遺物（第10図１～９）

1はＳＫ３の埋土から出土した備前焼の小壺である。頸部から胴上部にかけての破片である。肩部に自然釉がかかり，ロクロによるナデ調整である。内外面灰茶褐色，断面は灰色を呈する。焼成は良好である。

2はＳＢ１のＰ８から出土している瀬戸・美濃系の天目茶碗である。高台は浅い削り出しの輪高台で，畳付けの外面は削られ狭くなっている。高台脇は，斜めに削りがはいるが明瞭には施されていない。体部は，内弯して外上方に立ち上がり，口縁部は若干くびれ部を持ち口縁端部は丸味を持つ。内面と外面下半まで黒褐色釉と，底部は露胎で化粧掛けが施されている。胎土は吸水性のある黄白色土である。全体的に器壁が厚く，体部は丸味を持つ。全体の⅓の破片であるが，復元口径12cm，器高6.2cm，高台径4.6cmを測る。美濃大窯の編年で第Ⅱ期の製品と考えられる。

3はピット１から出土した青磁稜花皿である。口縁部破片であるが，腰部で折れ口縁部は外反する。口縁端部は，稜花になっている。内外面に密な貫入がはいり，やや黄味がかった青緑色釉が施されている。焼成は不良で，胎土の色調は黄白色を呈する。復元口径は12.8cmで，残存器高は2.5cmである。

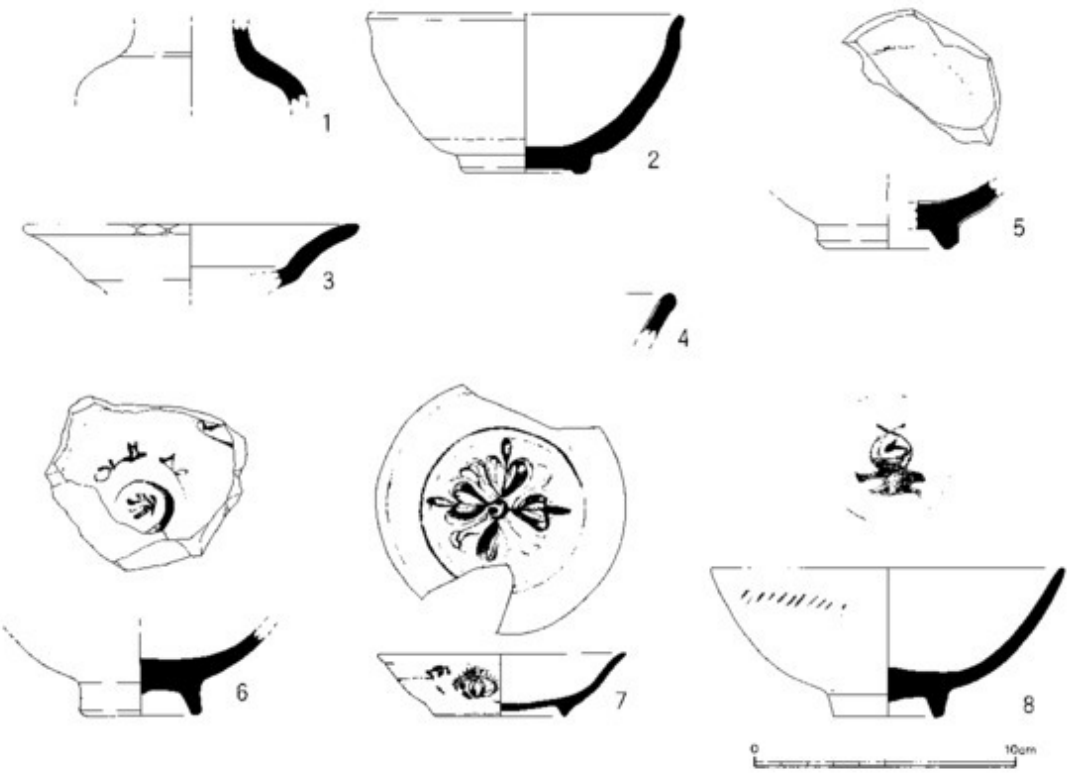
4は耕作土中から出土した青磁碗口縁部破片である。口縁部の小片で不明な点があるが，内外面無文の碗で口縁部が大きく外反しない製品と考えられる。内外面に密な貫入がはいり，青緑色釉が施されている。焼成は良好である。

5はＳＫ３から出土した青磁の碗である。底部破片であるが，見込みに浅い沈線が見られる。高台は削り出しの輪高台で，畳付けは斜めに削られ砂が溶着している。釉は内外面に施されるが高台外面までで，畳付け及び高台内面は露胎で内底面に一部釉がかかる。内外面密な貫入がはいる。復元高台径は，5.5cmである。

６もＳＫ３から出土した青磁碗である。底部破片であるが５よりも残りが良い。削り出しの輪高台で，畳付けは外面を削られ狭くなっている。内面には花文のスタンプが施されている。釉は内外面と高台外面まで施され，密な貫入がはいる。高台内面と外底部は露胎で赤色化している。高台径は4,4㎝である。

７はＳＢ１のＰ１から出土した染付皿である。若干口縁部が欠損しているが，ほぼ完形に近い製品である。高台部は削り出しで，断面三角形状を呈し畳付けは露胎で砂が溶着している。体部は内弯して外上方に立ち上がり，口縁部は外反する。体部外面には，牡丹唐草文が淡いコバルトで染め付けられている。さらに内面は見込みに２重の界線とその中に十字花文が同じ様に染め付けられている。全面に施釉されており貫入は認められない。口径9.6㎝，器高2.5㎝，高台径５㎝を測る。

８はＳＢ１のＰ８から出土した染付碗である。全体の⅓が残存している。高台部は逆台形状を呈しており，体部は内弯して外上方に立ち上がり口縁部に至る。見込みは一重の界線中に文様を染め付けている。口縁部の内面は一重の界線，外面は二重の界線中に波涛文の崩れが淡いコバルトで描かれる。釉は内外面と高台外面まで施されており，高台内面から内底面は露胎である。



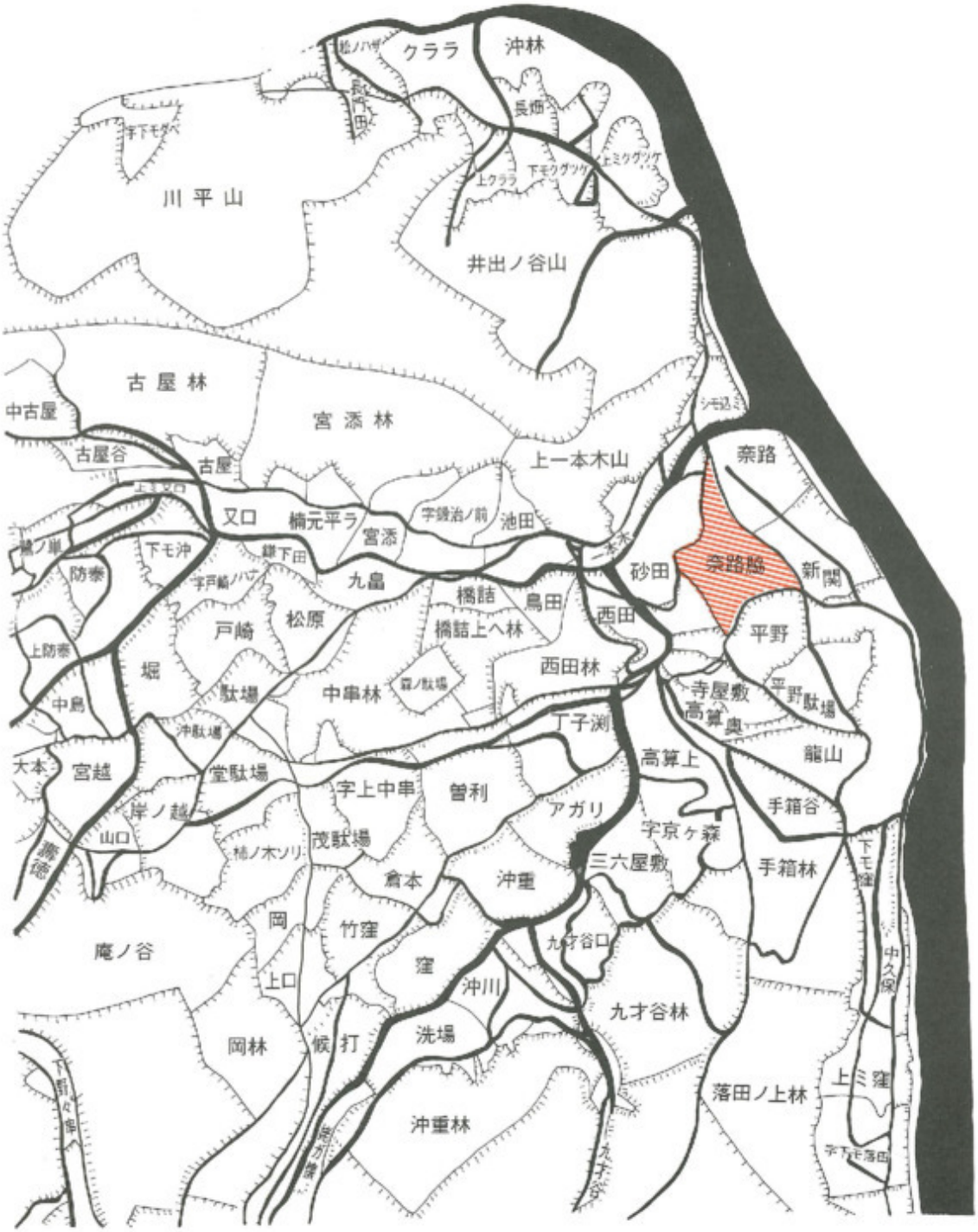
第10図　中世の遺物

Ⅵ　調査のまとめ

奈路遺跡は，縄文時代の遺跡として周知されているが，その後県教委の実施した分布調査で中世の遺物を表採したことから中世も含めた遺跡として知られる様になった。昭和43年と57年の踏査で石鏃，尖頭状石器，スクレイパーなどが表採され，木村剛朗氏が奈路遺跡の紹介をしている(1)。中世については，土師質土器片が若干表採されているのみで不明な点が多かった。今回の調査で，縄文時代の遺物と，中・近世の遺構・遺物を検出している。縄文時代は遺物が少ないため本遺跡の特徴をつかむまでいかないが，中世に関しては周辺の城跡を含め若干の考察を行うことができるためまとめとしたい。

奈路遺跡から，石鏃・スクレイパー・尖頭状石器等が表採されているが，その中で石鏃に特徴が認められる。トロトロ石器と名称されているもので，この石鏃は押型文土器分布圏の西日本を中心とし出土していることから，押型文土器と伴出する時期の石器と考えられている。編年的に早期の時期であり，本遺跡の上限を知る手がかりになっている。さらに後期の石鏃も出土しており，昭和60年の試掘調査でも後期後半の土器片が出土していることから(2)，今までの数少ない資料の中でもある程度の時期を決めることができる。今回の調査では，ＳＫ１から姫島産黒曜石のコアフレイク（１）が出土しており，縄文時代の遺構として考えられるのは本遺構のみである。その他ＳＫ３から磨製石剣（３），有孔石製品（４），ＳＢ１のＰ８から石鏃（２）が出土しているが，これらはすべて中世の遺構に混入しているものである。しかしこれらの遺物が出土していることは，縄文時代の包含層が中世の時期まで残存していた可能性を示唆しており，奈路遺跡は河岸段丘上の広範囲に縄文時代の集落が広がっていたと考えられる。さらに姫島産の黒曜石が出土し，表採品でも認められる点は，時期は不明であるが交易が行われている証拠となる。

磨製石剣は，県下でも発掘調査では初出土で貴重な資料となった。しかし時代的には，出土状況等から明確に縄文時代の遺物と断定はできない。石剣の形態及び製法から見ると弥生時代の可能性もある。この磨製石剣と同形態の製品と考えられる遺物が，宿毛市橋上遺跡で表採されている。表採者の木村氏によると全面磨製で両端部は折損しており両刃を形成し，断面凸レンズ形をしているとのことである。橋上遺跡は，縄文時代の遺物散布地として周知されている遺跡で弥生の遺物は確認されていない(3)。しかし隣接する町で，大正町の江師遺跡・森駄場遺跡では弥生中期後半の神西式土器及び石鏃が出土している。この石鏃はチャート製であるが弥生中期の石鏃としている(4)。これらのことは，他の四万十川流域の河岸段丘上に弥生の遺跡が存在する可能性も含んでいるということである。十和村内では弥生中期の神西式土器の発見はないが，大正町と地理的に近く遺跡の立地も同様であることから，全く弥生時代の痕跡が皆無であるとはいい難い。奈路遺跡出土の有孔石製品は不明であるが，姫島産黒曜石の剥片及び石鏃については縄文時代の遺物といえる。磨製石剣の時代認定ついては，現段階で木村氏の



第11図　奈路遺跡周辺の小字図（赤印が奈路遺跡の小字）

石器表採品の全体的内容からすると縄文時代に所属せざるをえないが，ここでは将来の課題とする資料としておきたい。

中世については，掘立柱建物跡が２棟及び土坑を検出している。建物のＳＢ１は，柱穴Ｐ１から（７）の染付皿とＰ８から（２）の瀬戸・美濃系の天目茶碗と（８）の染付碗が出土していることからほぼ16世紀の前半頃の時期を与えることができる[5]。（２）の天目茶碗は，大窯の編年でⅡ期の製品と考えられ，16世紀の前半でも中葉に近い時期を想定できる。さらに（７）の染付皿は，小野正敏氏の編年で染付皿Ｂ１群のⅥに比定でき[6]，先述した天目茶碗とほぼ同様な時期を与えることができる。ＳＢ２は，出土遺物が皆無のため時期は不明であり，埋土の色調もＳＢ１と異なるため近世の建物の可能性もある。ＳＫ３は，（５）と（６）の青磁碗が出土している。ＳＫ３はＳＢ１とほぼ同時期の遺構としてさしつかえない。本遺跡で検出した遺構は少ないが，中世で建物の時期は16世紀前半を中心としてその前後を想定することができる。建物の周囲にもピット群を検出しておりさらに調査区外にも中世の建物が残存している可能性もある。奈路遺跡の周辺の小字図（第11図）でも，隣接する場所に「屋敷」名の小字が残り可能性の一端を窺い知る事ができ，16世紀の前半代に，この地域に集落が展開していたと考えられる。これまで十和村内で中世の遺構が検出された例はないが，現存する十川や昭和の集落付近には中世の遺構が残存していると考えられる。奈路遺跡の所在する大井川には，宮添城跡・大井川東城跡・大井川城跡の３城跡が確認されている。機能した時期等は不明であるが，長宗我部地検帳には城跡としての記載はない。これらのことから16世紀後半には３城跡とも機能しておらず廃城になっている。明確にはいえないが，15世紀後半から16世紀前半の時期に構築機能した時期を考えることができる。奈路遺跡で検出した遺構も16世紀後半の時期を与えるにはやや無理があり，城跡の機能した時期とほぼ同時期である。奈路の集落は，周囲の３城跡と時を同じくして盛行したものと考えられる。

十和村では，奈路の中世遺跡より遡り歴史を語る考古学の資料として，古城地区の吉良明神（別名擂鉢神社）に保蔵されている瓦質土器の擂鉢がある。この擂鉢は，当社の御神霊として，雨乞いの行事に使用されたものである。瓦質の擂鉢は，口縁部は緩やかに外反し口縁部を特に厚く作り，内面には卸し目が４条単位で四カ所に施されている。十和村史では田村遺跡出土の瓦質土器より古い製品で，鎌倉時代後半から室町時代初頭（13世紀後半～14世紀初頭）に位置付けている[7]。県内でも瓦質土器の資料が多くなりさらに調理具である擂鉢の変遷もつかめてきた。県内の調理具を概観してみると，鎌倉時代を中心に東播系のコネ鉢が多く搬入されており[8]，備前焼Ⅲ期の擂鉢は若干出土しているのみである。土佐においては東播系コネ鉢が14世紀前半頃まで搬入され続け，その後備前焼擂鉢が主流を占めてくるのは14世紀後半から15世紀を中心とした備前焼編年のⅣ期[9]になってからである。瓦質土器は東播系コネ鉢と備前焼擂鉢を埋める時期に土佐で焼成されたものと考えられる。瓦質土器の内面に卸し目の条線が施されていることは，備前焼擂鉢の模倣でありその時期はⅢ期の終わりからⅣ期の製品が多く

搬入されてくる時期までである。Ⅲ期の終末が南北朝初期に年代が与えられており，瓦質土器擂鉢の初現の時期は14世紀前半から中頃にかけての時期を考えることができる。以上のことから瓦質土器擂鉢を鎌倉時代まで遡らすのは時期尚早で，ここでは若干時期を下げて考えたい。瓦質土器の擂鉢は，日常使用するものであり十和村内の歴史が室町時代の初頭まで遡って考えることができる一資料である。

本遺跡からは，輸入陶磁器の青磁・染付が出土している。四万十川上中流域の中世遺跡から輸入陶磁器の出土する遺跡は数少ない。出土している遺跡を概観すると，西土佐村の本村半家遺跡[10]から16世紀代の染付皿，大正町下岡遺跡[11]・木屋ケ内遺跡[12]から15世紀後半～16世紀にかけての青磁碗・皿などがあげられる。各遺跡とも量的に少なく，本遺跡が比較的まとまって完形品に近いものが出土している。四万十川下流域の中村市周辺では，数多く輸入陶磁器が出土しており，古くは12世紀から輸入陶磁器が認められる。15・16世紀の遺跡は中世山城の調査が多く，中村城跡[13]はもちろんのこと小規模城郭でも輸入陶磁器が出土している。一条氏の勢力下における地域であることから，輸入陶磁器の搬入も理解できる所である。しかし四万十川上流域の中世遺跡で，輸入陶磁器が認められる点は今後その搬入経路も含めて考えていかなければならない点である。さらに奈路の中世集落では，瀬戸・美濃系の天目茶碗なども出土しており輸入陶磁器の出土内容も含めて，集落の性格を一般的集落と比較検討する必要がある。

幡多郡の北幡地域では，縄文時代の遺跡は多く十川駄場崎遺跡を含め調査も実施され成果が上がっている。その後弥生から古代までの様相は不明であり，さらに中世においても城跡は確認されているが集落の調査は数少ない。山間部に於ける中世社会の様相を理解するためには，文献史学や民俗学を含め学際的な研究が望まれる所であるが，今回の調査でも北幡地域の中世村落を理解する上での一資料を提供できたと思う。

注

1　木村剛朗「奈路遺跡」『四万十川流域の縄文文化研究』　幡多埋文研　1987年

2　調査担当の山本哲也氏の御教示による

3　木村剛朗「高知県宿毛市橋上遺跡とその遺物」『古代文化』26巻6号　1984年

4　木村剛朗氏の御教示による

5　田口昭二「美濃焼」『考古学ライブラリー』17．ニュー・サイエンス社．

6　小野正敏「15～16世紀の染付碗皿の分類と時代」『貿易陶磁研究』No．2　1982年

7　岡本健児「第四章　北幡・窪川台地の古代・中世の考古学」『十和村史』十和村　1984年

8　荻野繁春「財産目録に顔を出さない焼物たち」『国立歴史民俗博物館研究報告』25．国立歴史民俗博物館　1990年

9　間壁忠彦・葭子「備前焼研究ノート」（1）～（3），『倉敷考古館研究集報』1・2・5倉敷考古館

1966・1967年

10　岡本桂典「本村半家遺跡」西土佐村教育委員会　1989年

11　大正町教育委員会が試掘調査を実施した概要報告による

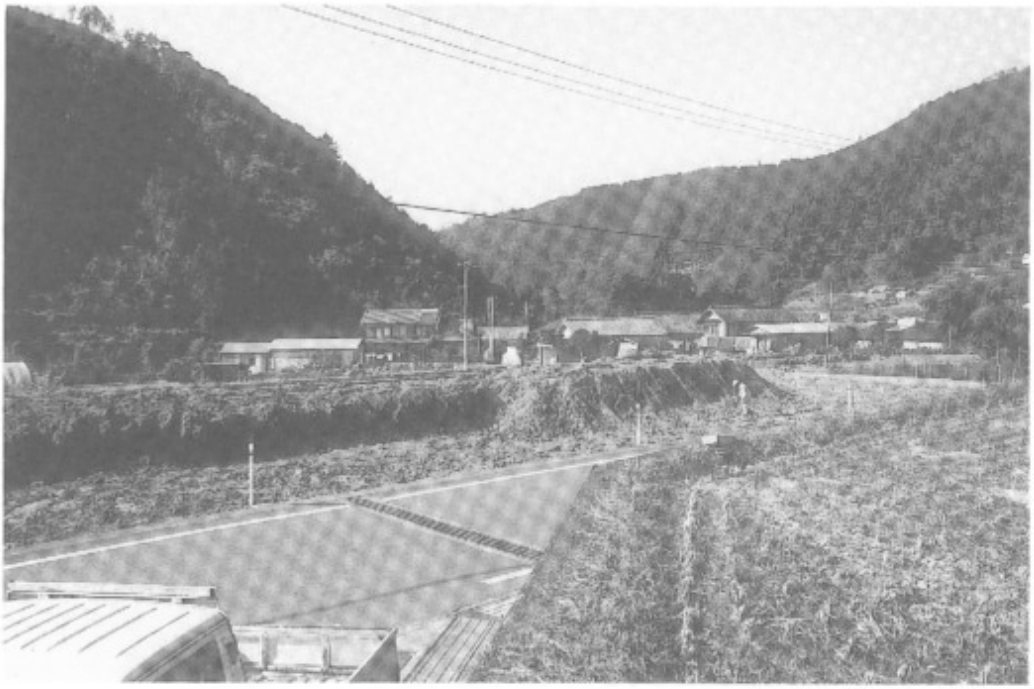
12　調査担当の前田光雄氏の御教示による

13　松田直則　他「中村城跡」中村市教育委員会　1985年

図　　版

図版1

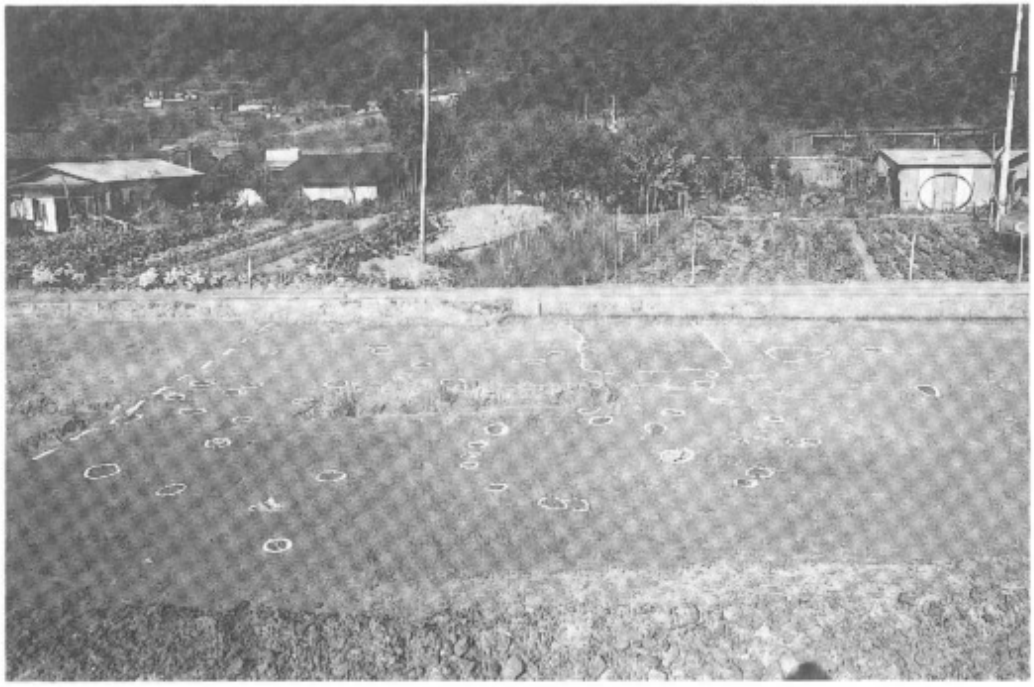
奈路遺跡調査前全景（南から）



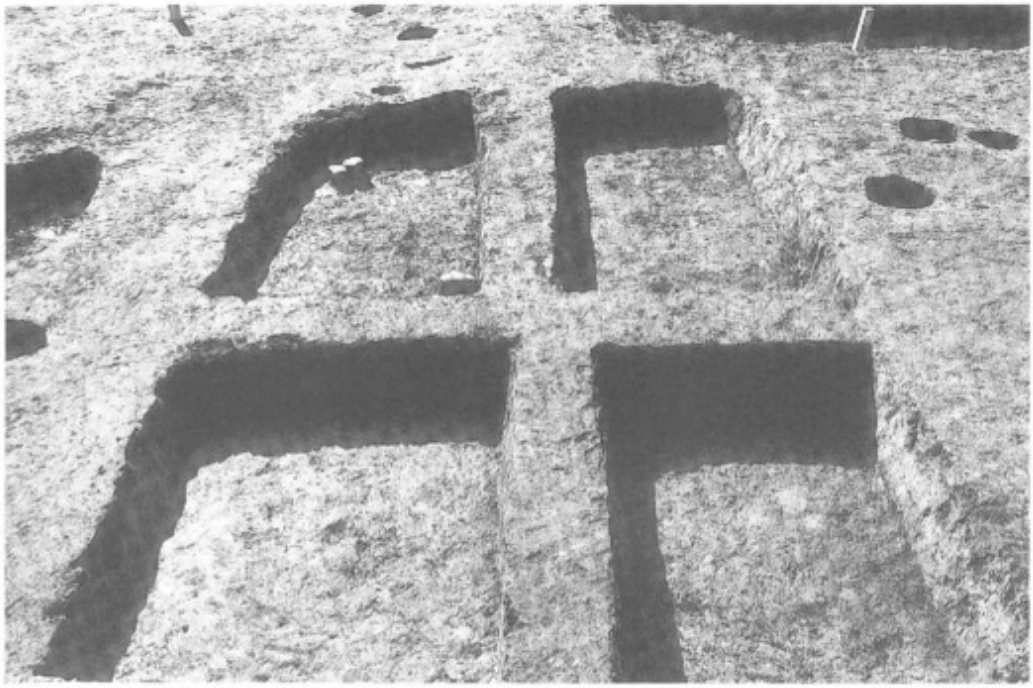
同　　上　（南東から）

図版 2

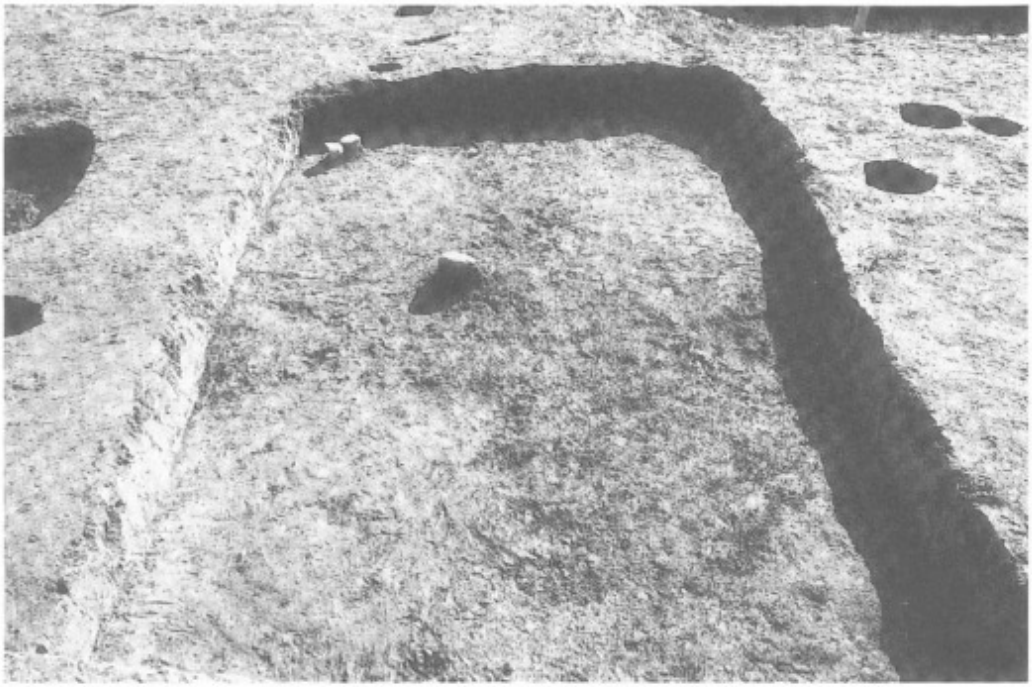
調査区全景（東から）



遺構検出状況（南から）

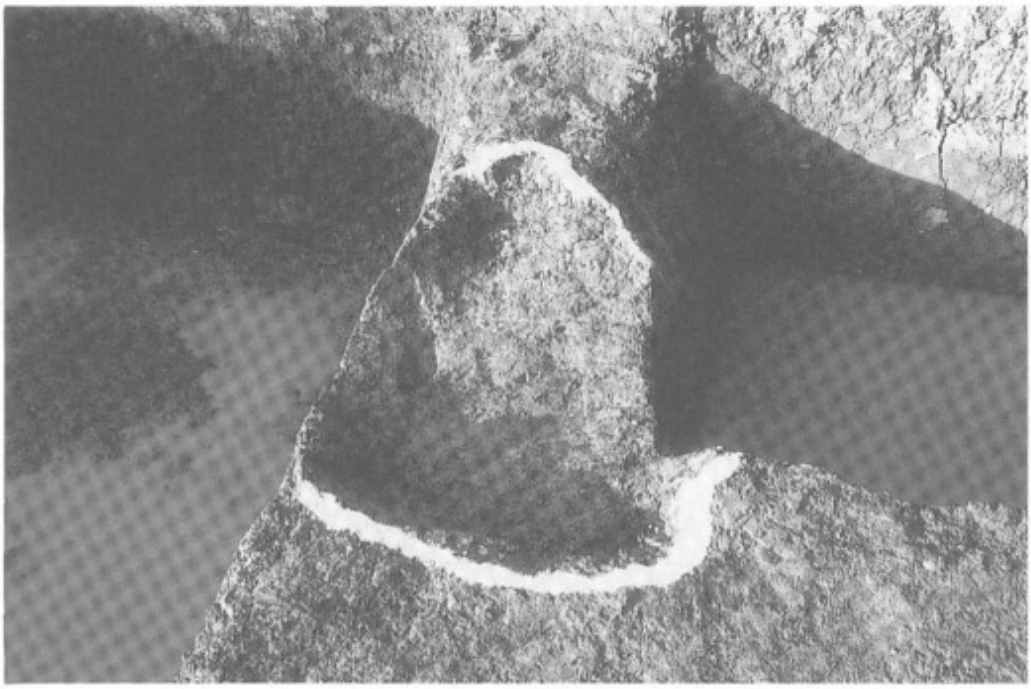


ＳＴ１（南から）

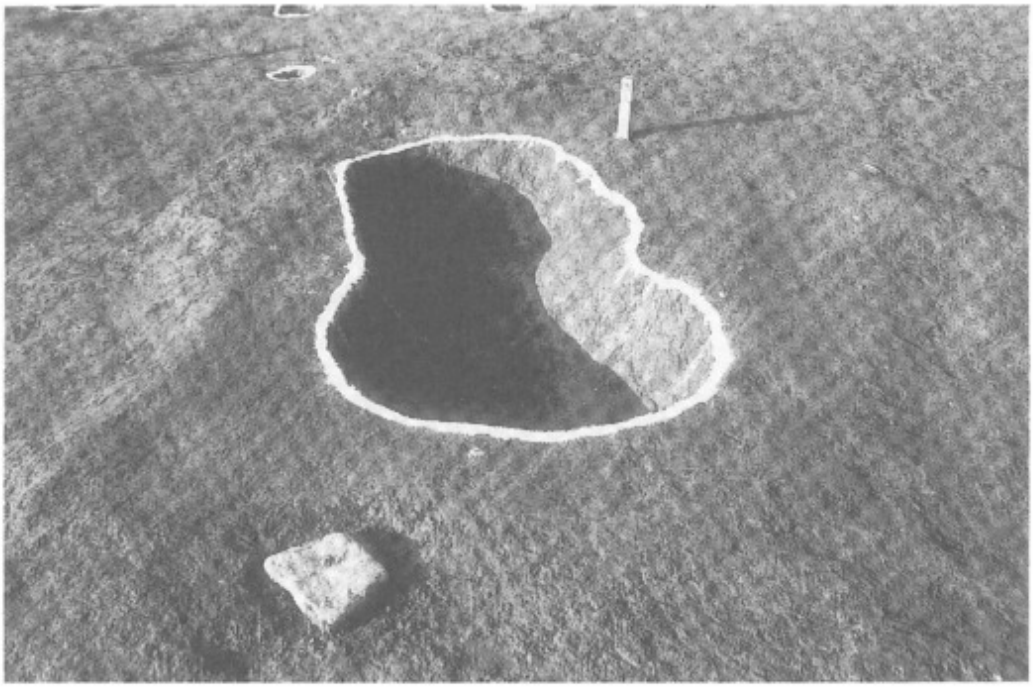


ＳＴ１完掘状況（南から）

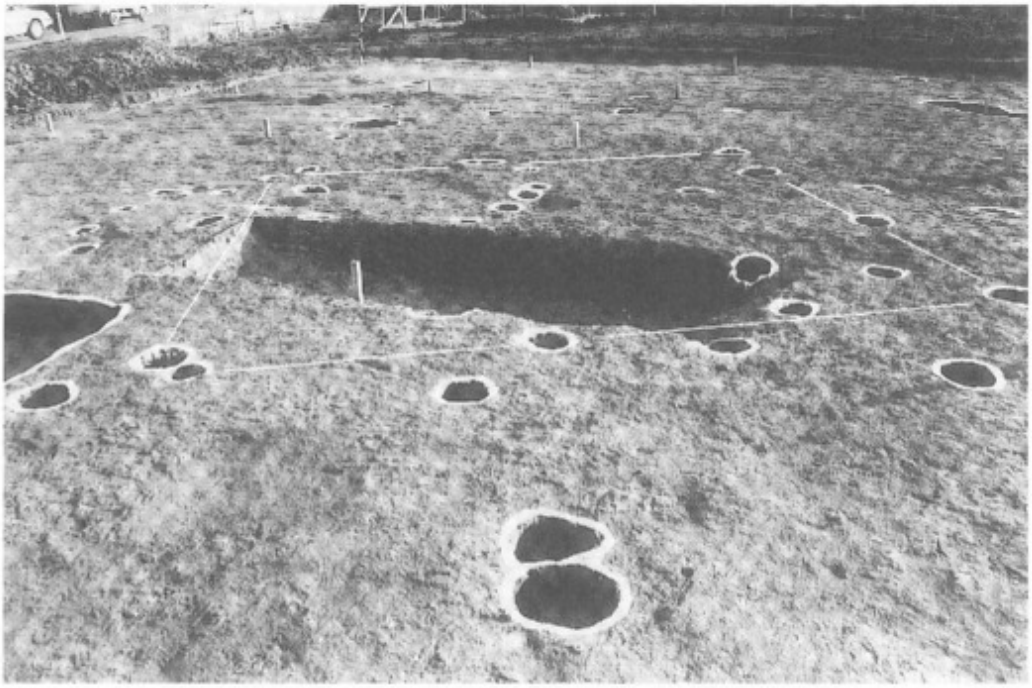
図版 4



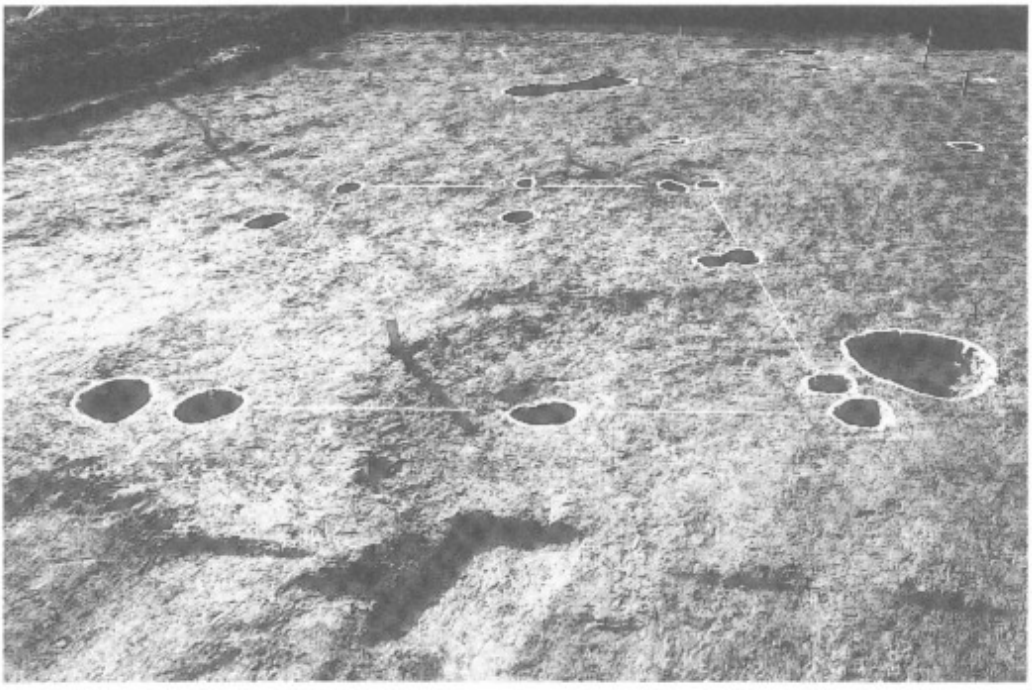
ＳＫ１完掘状況



ＳＫ３完掘状況

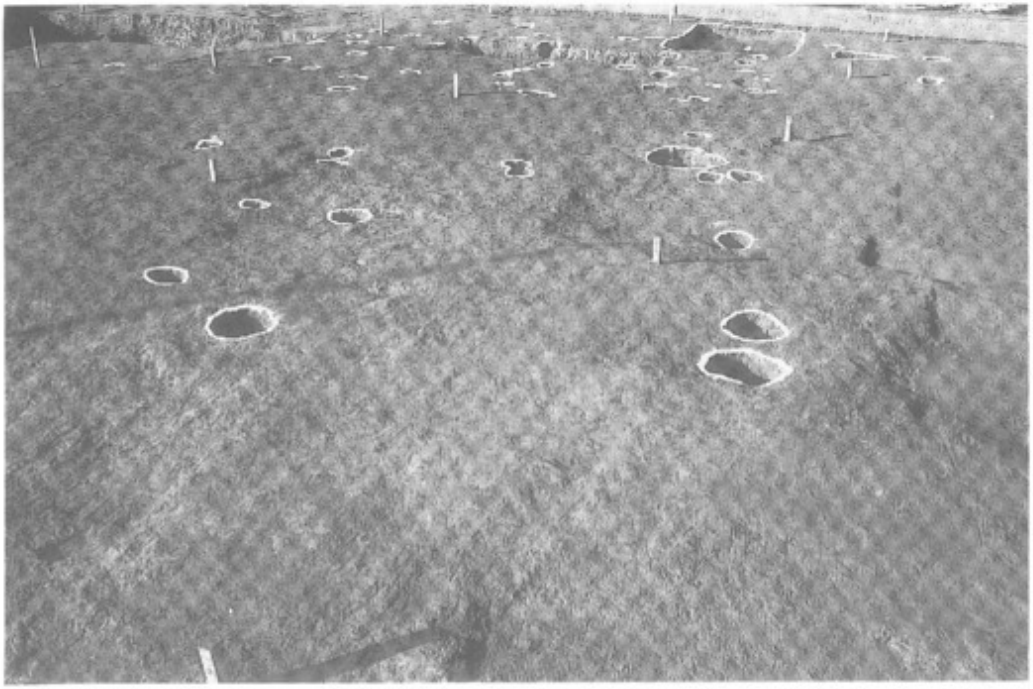


ＳＢ１完掘状況（北から）

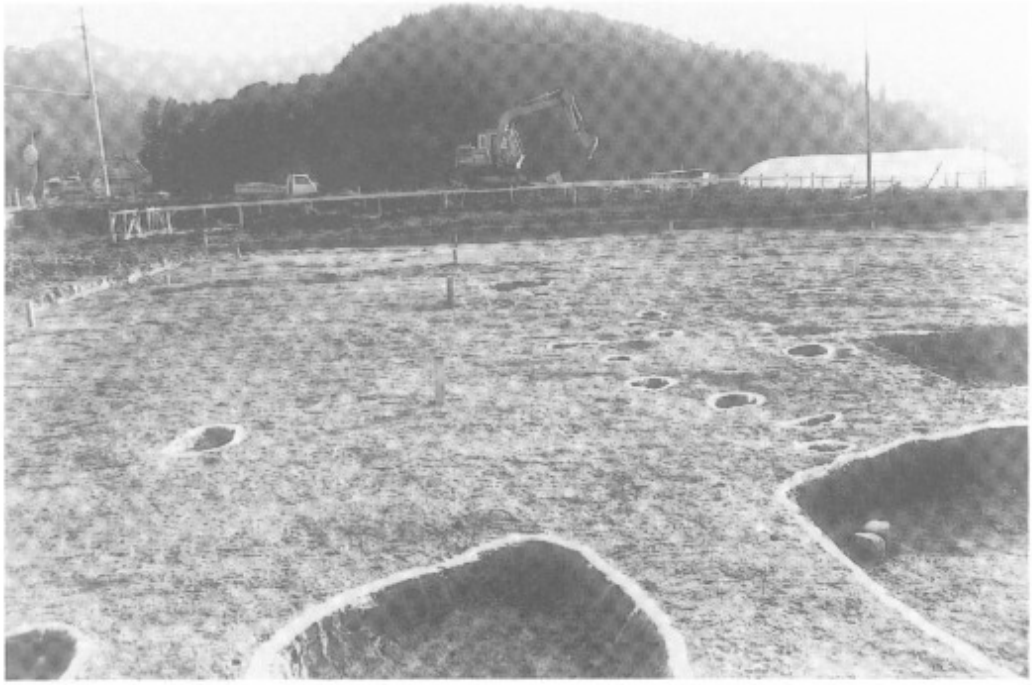


ＳＢ２完掘状況（東から）

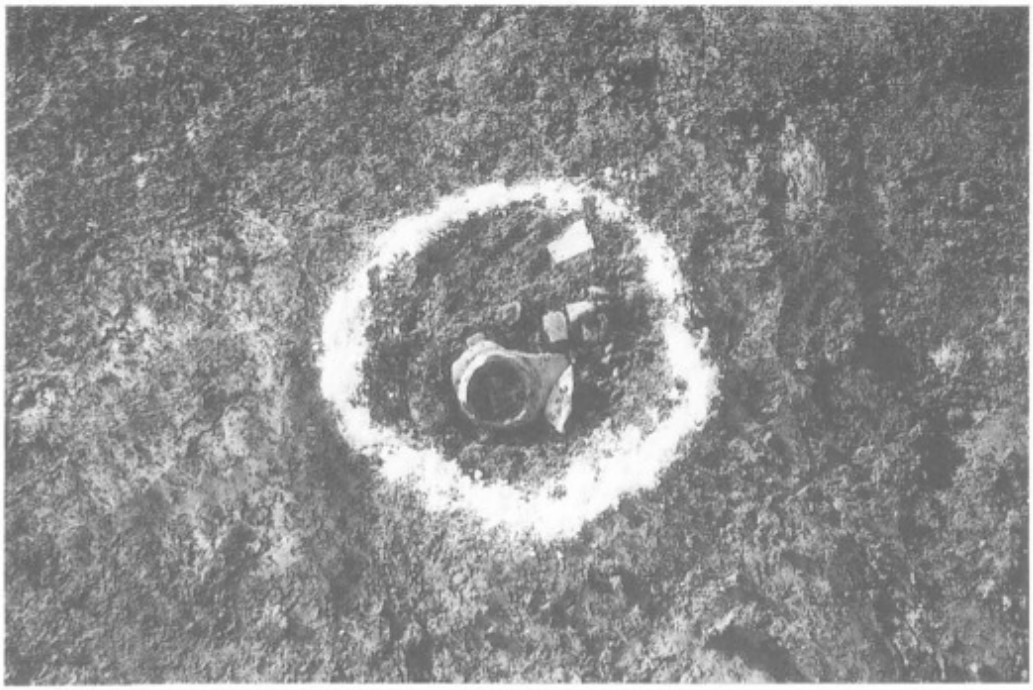
図版6



ＳＢ及びPit群完掘状況（南から）



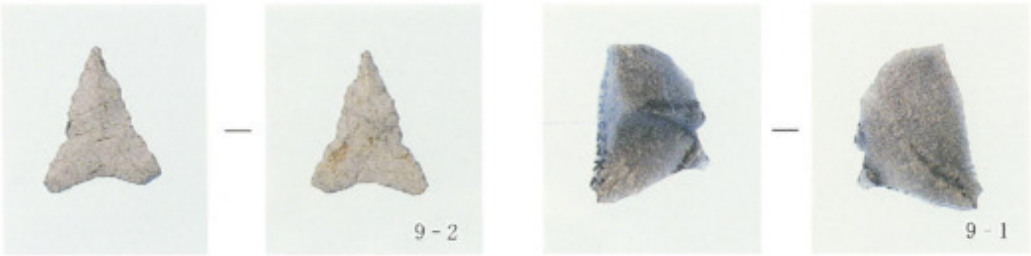
Pit群及びＳＫ２完掘状況（北から）



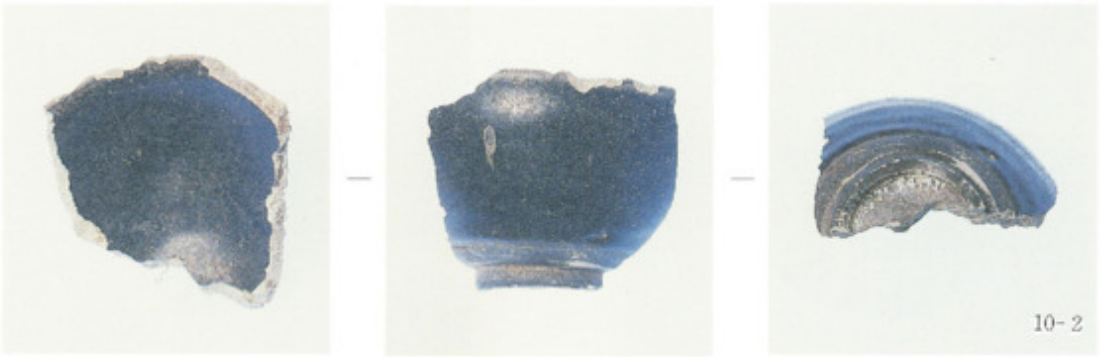
Pit 内遺物出土状況

調査風景（東から）

図版 8



縄文時代及び時期不明の遺物



10-2

10-5

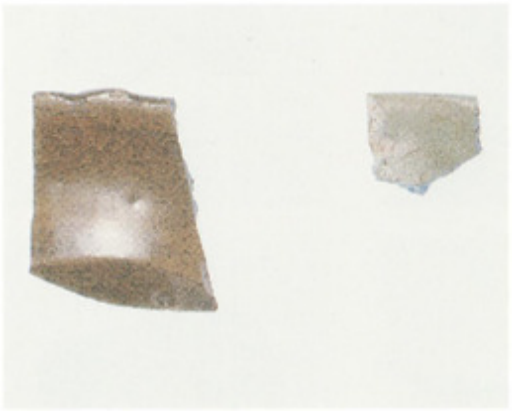
10-6

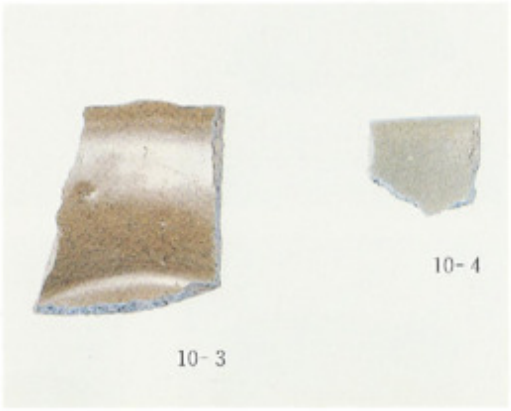
10-7

中世の出土遺物 1

図版10

10-1





10-4

10-3

10-8

中世の出土遺物2

付　　編

川口新階遺跡

十和村十川小学校プール建設に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

Ⅰ　調査の契機と経過

1．契機と経過

川口新階遺跡は，四万十川の上流幡多郡十和村川口に所在し，四万十川とその支流である長沢川の合流部西側の河岸段丘上に位置する。以前，石鏃が表採されたことによりその存在が確認された遺跡である。今までに発掘調査は行われておらずその詳細は不明であるが，隣接して川口ホリキ遺跡や長沢川を挟んで十川駄場崎遺跡が所在することから縄文時代早期から後期にかけての遺跡ではないかとみられていた。さらに，北側には中世の山城であるコノ（龍見）城跡もあり，その時期の集落跡が存在することも考えられる。なお，本遺跡は以前十川中学校裏庭遺跡と呼称されていたが，昭和61・62年度に実施した高知県遺跡詳細分布調査の際，地名をとって川口新階遺跡と改名した。

第１図　十和村位置図

今回の調査は，平成４年度に十和村が計画している十川小学校プール建設工事に伴うもので，十和村教育委員会が調査主体となり実施した。建設予定地は長沢川に隣接した河岸段丘上で遺跡の縁辺部ではないかとみられた。調査は，まず試掘調査を行い，遺構・遺物が確認され次第発掘区を拡張することとした。調査期間は平成４年４月20日から４月24日までの５日間であった。

2．　調査日誌抄

1992年４月20～４月24日

４・20　本日から発掘調査を開始する。まず，竹の除去作業を行ってから試掘トレンチの設定を行う。引き続き表土層の除去及び周辺の地形測量を実施した。

４・21　土層の掘削を行い，順次精査していくが，剥片が数点出土するのみで遺構とみられるものは全く検出されない。

４・22　雨天のため現場作業は中止。

４・23　本日はＡトレンチの精査とＢトレンチの調査を行う。Ａトレンチの土層断面の写真撮影並びに実測を行う。

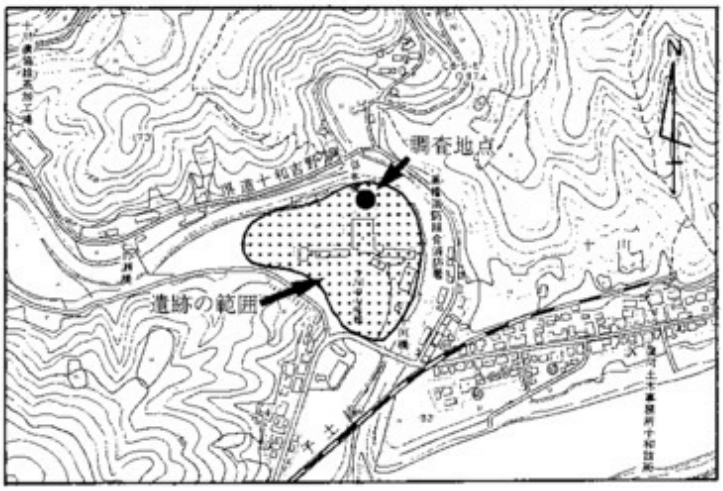
４・24　Ｂトレンチ精査を行う。Ｂトレンチの土層断面の写真撮影と実測を行った後，試掘トレンチを平板で実測する。最後に完掘状態の写真撮影を行う。引き続き埋め戻しを行い発掘調査を完了する。

Ⅱ　調査の概要

1．調査の方法

調査対象地は，東西に細長い約600㎡の水田を中心に段々になった狭い２枚の水田と斜面になっており，その面積は約1,000㎡であった。実質的には東西に細長い水田を調査対象地とし，まず，長辺に沿って４×20ｍの試掘トレンチ（Ａトレンチ）を設定した。次に，Ａトレンチに直行する４×10ｍの試掘トレンチ（Ｂトレンチ）を追加し，さらにそれぞれにサブトレンチを設け，地山の砂礫層まで掘削し，遺構・遺物の有無を確認した。

第２図　遺跡位置図（Ｓ＝１：25,000）



第３図　遺跡の範囲と調査地点（Ｓ＝１：10,000）

調査の結果，遺物包含層ではないかとみられる土層も検出されたが剥片を僅かに含む程度で土器片も細片が２点出土しただけであり，発掘区の拡張は行わなかった。また，集石炉等の遺構は検出されなかった。

発掘調査面積は試掘トレンチ部分のみで104㎡であった。

2．調査の概要

(1)　試掘トレンチの概要

面積約600㎡の水田のほぼ中央に設定したＡ・Ｂ２本の試掘トレンチを調査した結果，第Ⅳ層から白色頁岩の石器剥片が僅かに出土したのみで遺構は確認できなかった。

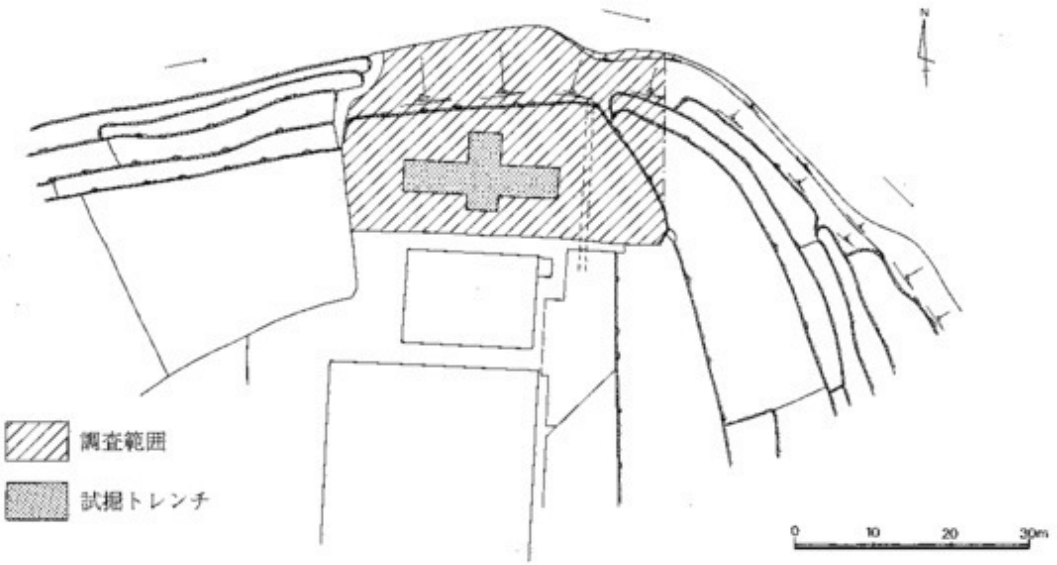
(2)　層序

調査区において認められた基本層序は以下の通りである。

第Ⅰ層　耕作土

第Ⅱ層　淡黄色砂性粘質土（マンガン粒を多量に含む）

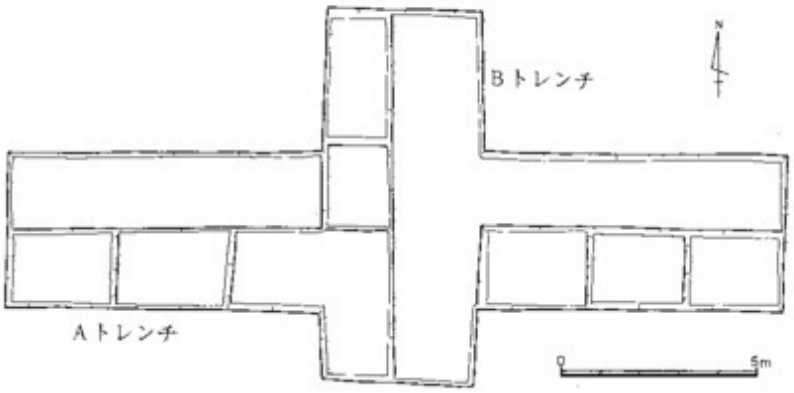
第Ⅲ層　淡黄色砂性粘質土（アカホヤ火山灰を含む）



第4図　発掘区及び周辺地形図

第Ⅳ層　暗褐色粘質土層
第Ⅴ層　褐色粘土層
第Ⅵ層　淡褐色粘土層
第Ⅶ層　褐色粘性砂質土層
第Ⅷ層　灰褐色砂層（小礫を含む）
第Ⅸ層　褐色粘性砂質土層
第Ⅹ層　褐色砂礫層

以下の層序の内，僅かであったが剥片等遺物が出土したのは第Ⅳ層中であり，本層を遺物包含層とみることができる。しかし，土器片が皆無に近くその時期を明確にすることはできなかった。また，遺構とみられるものは検出されなかった。



第5図　試掘トレンチ平面図

Ⅲ 遺　　物

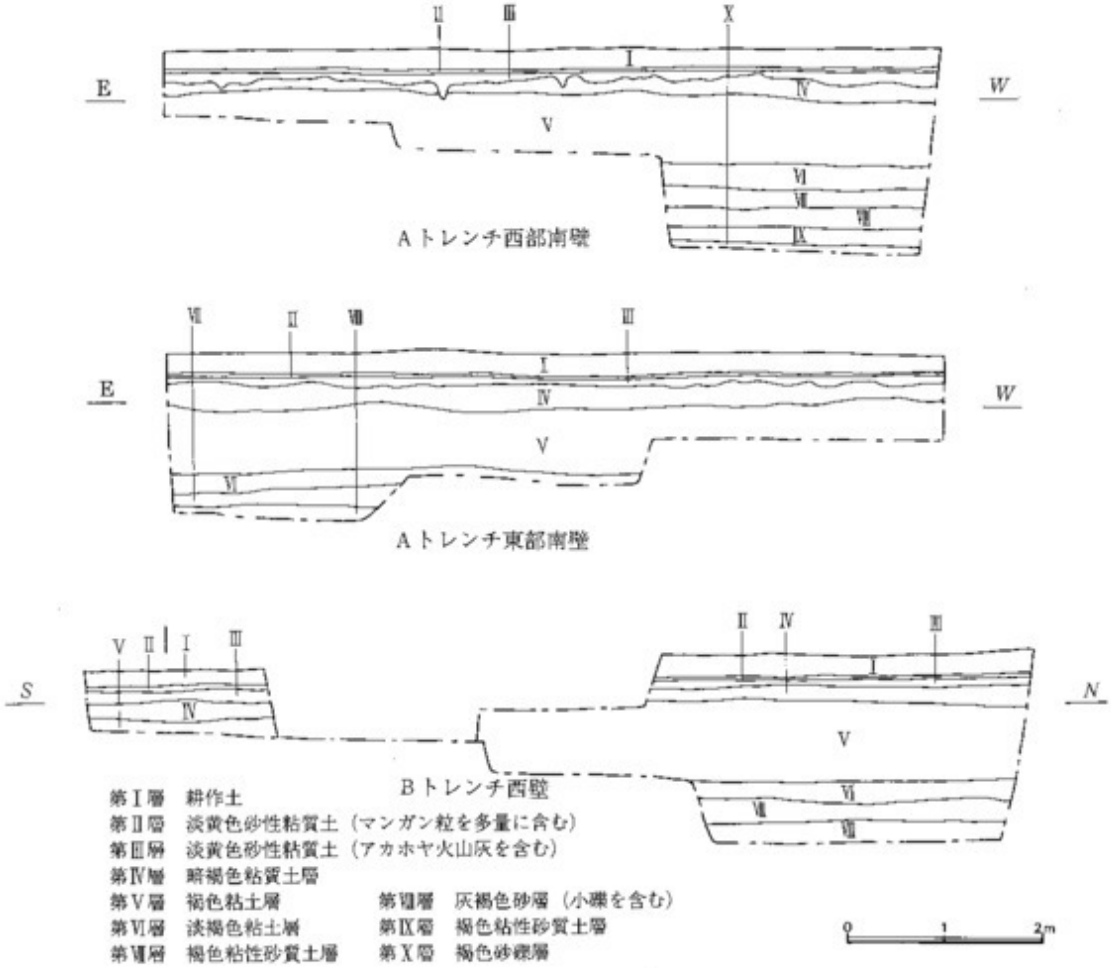
今回の調査では遺構が検出されなかったので，遺物包含層から出土した遺物についてその概略を記すこととする。出土遺物は，縄文土器片が2点，叩石が1点，剥片が約50点（チャートが1点あった以外はすべて白色頁岩である）であった。縄文土器片は細片でほとんど原形を止めず，かつ摩滅も著しく図示することは不可能で，その時期を見出し得なかった。

叩石（第7図-1）

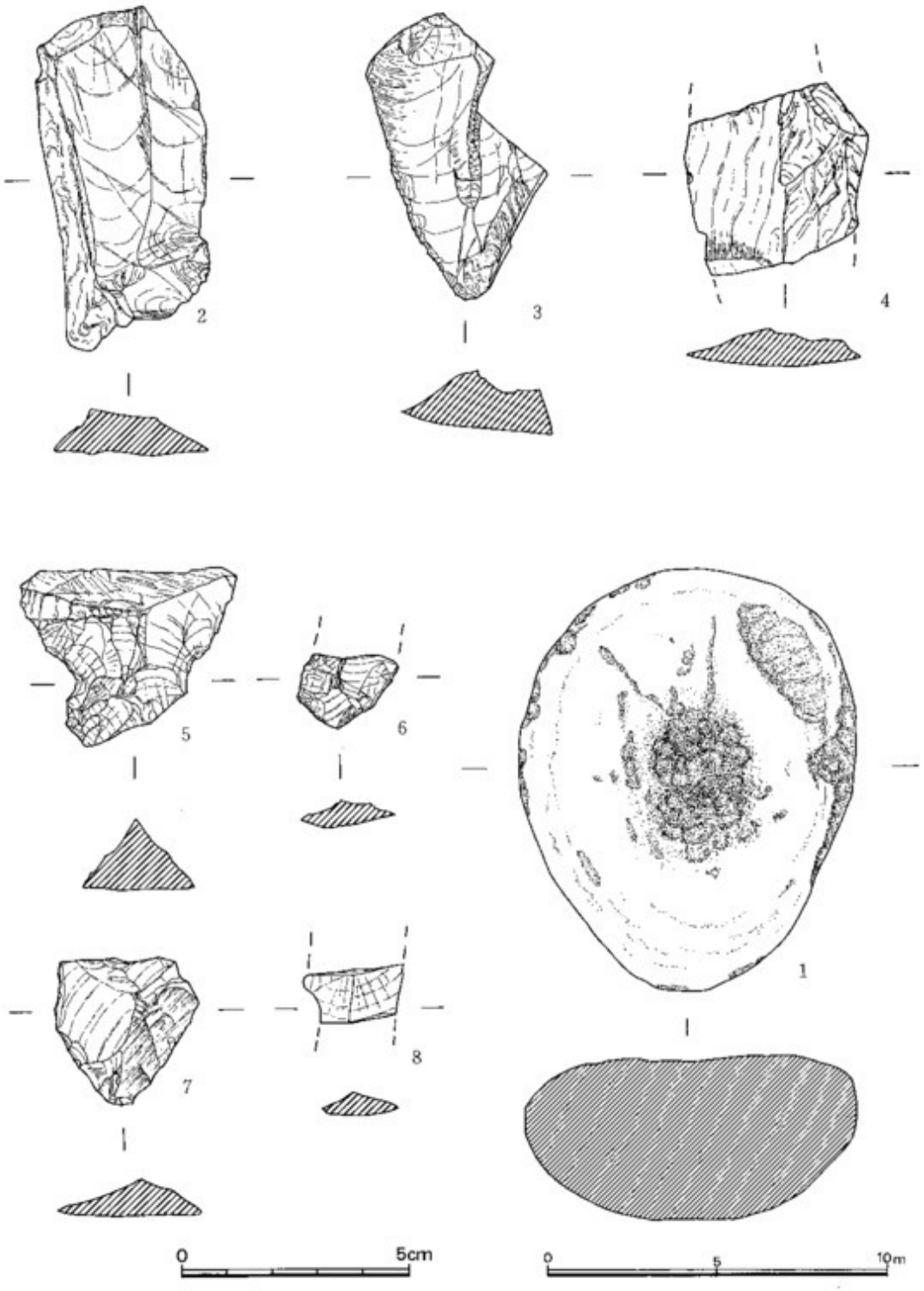
粗粒砂石の川原石を使用した掌に乗る程度の大きさのもので，両面と側面に敲打痕が残る。特に右側面が顕著である。最大長12.6cm，最大幅10.0cm，最大厚4.8cm，重量760ｇを計る。

石器剥片（第7図－2～8）

すべて白色頁岩で，それぞれに剥離痕が残る。重量は2が33.0ｇ，3が29.1ｇ，4が13.3ｇ，5が18.4ｇ，6が1.4ｇ，7が6.2ｇ，8が1.1ｇを計る。



第6図　試掘トレンチセクション図（ＤＬ=81.5m）



第７図　第Ⅳ層出土遺物実測図

Ⅳ ま と め

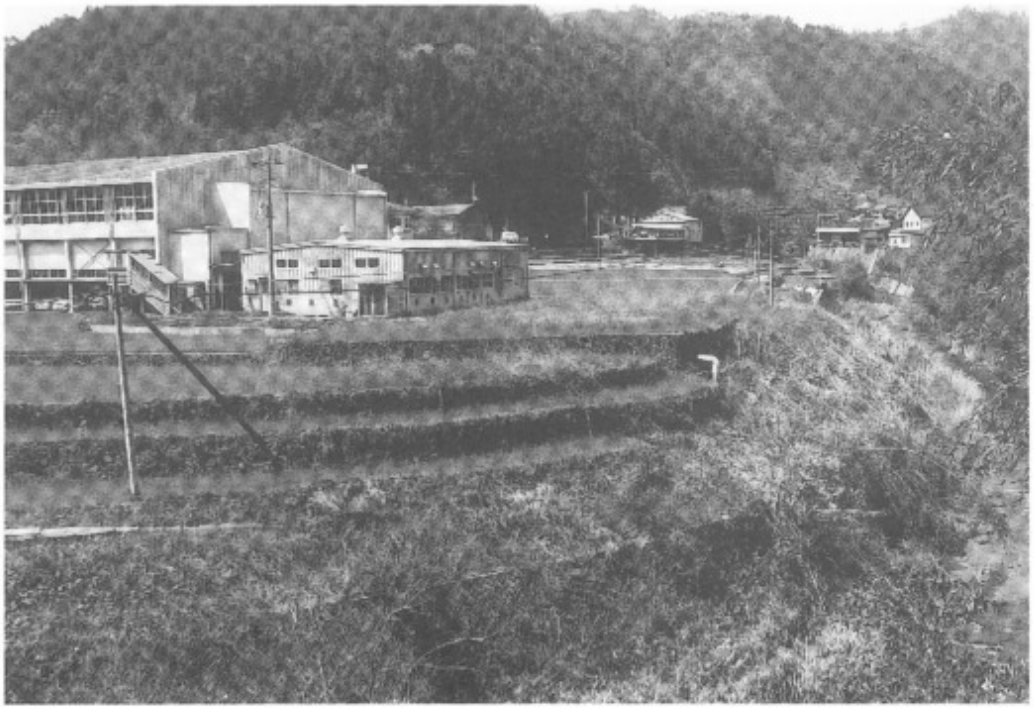
今回の調査では一応遺物包含層を確認することができたが，遺物の包含量が少なく，かつ出土遺物と言えばほとんどが石器剥片で製品が皆無に近い状態であった。また，遺物包含層の色調も十川駄場崎遺跡や川口ホリキ遺跡のそれに比べ薄かった。このような状況から判断して当該調査区は川口新階遺跡の縁辺部に当たるものと考えることができ，遺跡の中心部は現十川小・中学校の校舎から運動場にかけての部分と思われる。

今回検出された遺物包含層の時期については，判断資料に乏しく決め手を欠くが，対岸に所在する十川駄場崎遺跡の発掘調査結果から類推すると白色頁岩の石器剥片は縄文時代早期・前期に目立って出土していること，遺物包含層とみられる第Ⅳ層が地表下約80cmで検出されていることなどから縄文時代前期とみることもできよう。一方，隣接する川口ホリキ遺跡は縄文時代後期を中心とする遺跡であることからその時期の遺構・遺物が存在する可能性もあろう。

図　　版

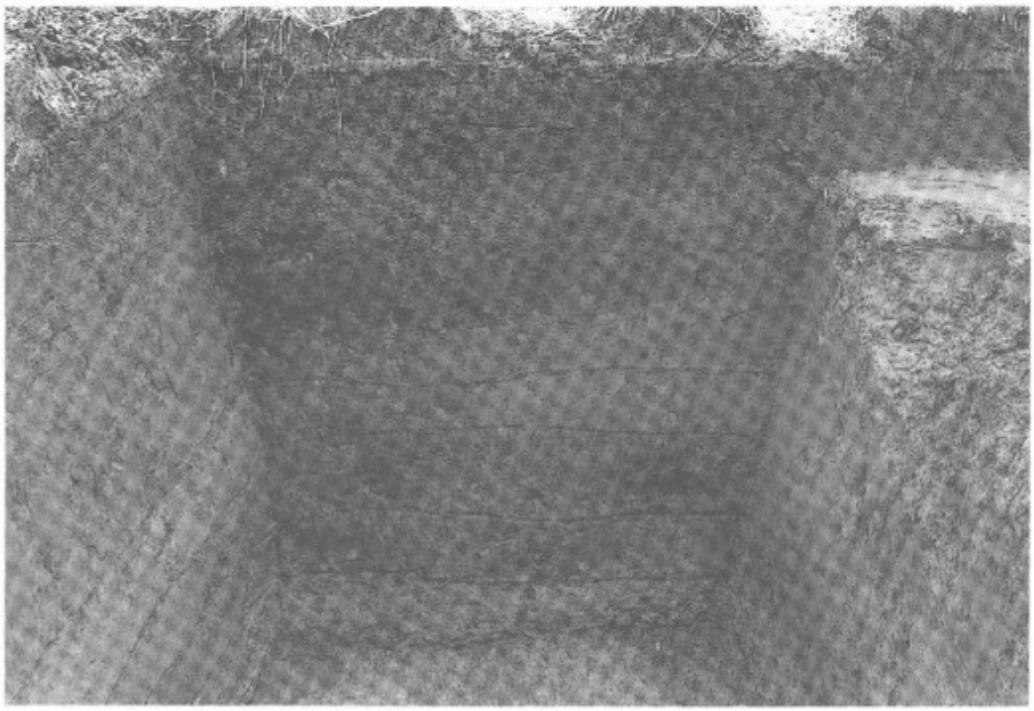
図版1

調査前全景（北より）

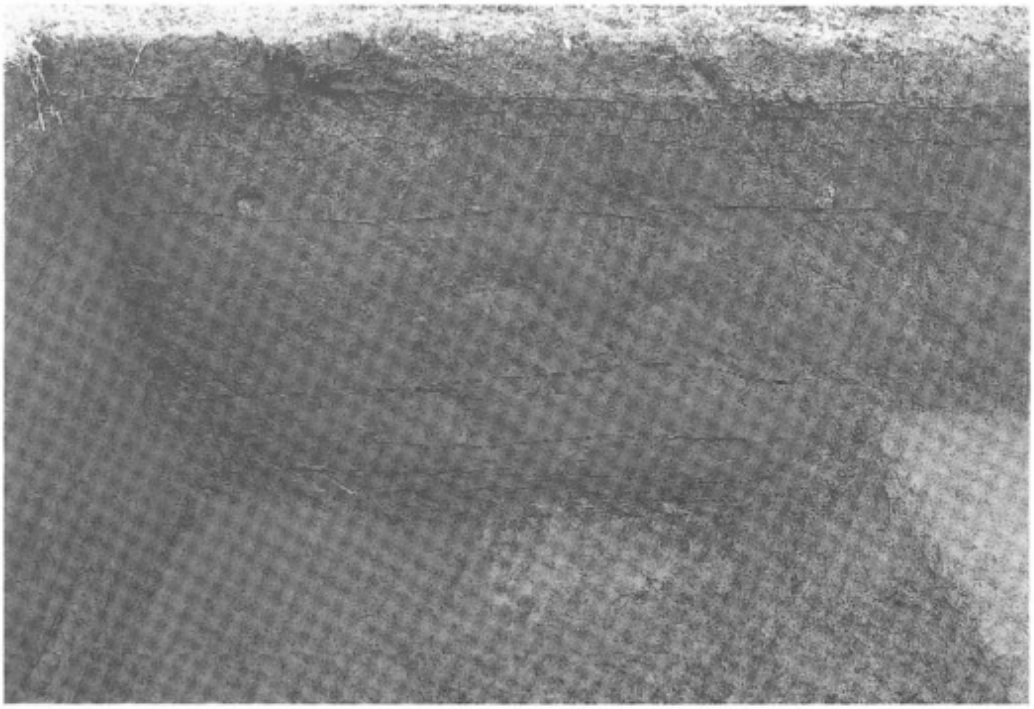


調査前全景（東より）

図版 2

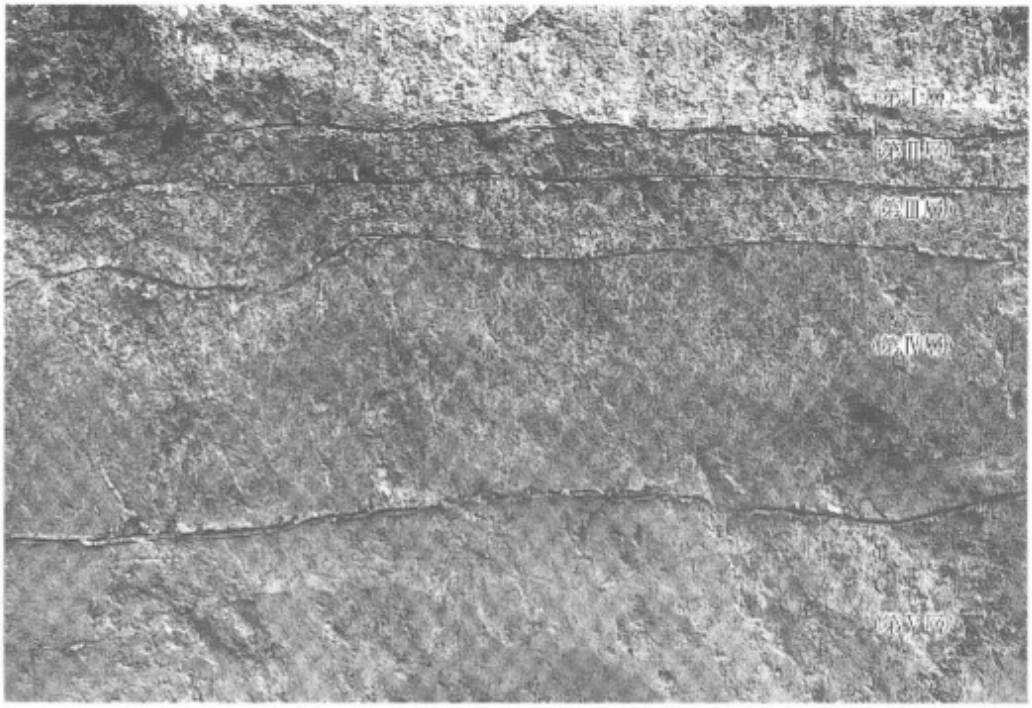


Aトレンチ西壁セクション

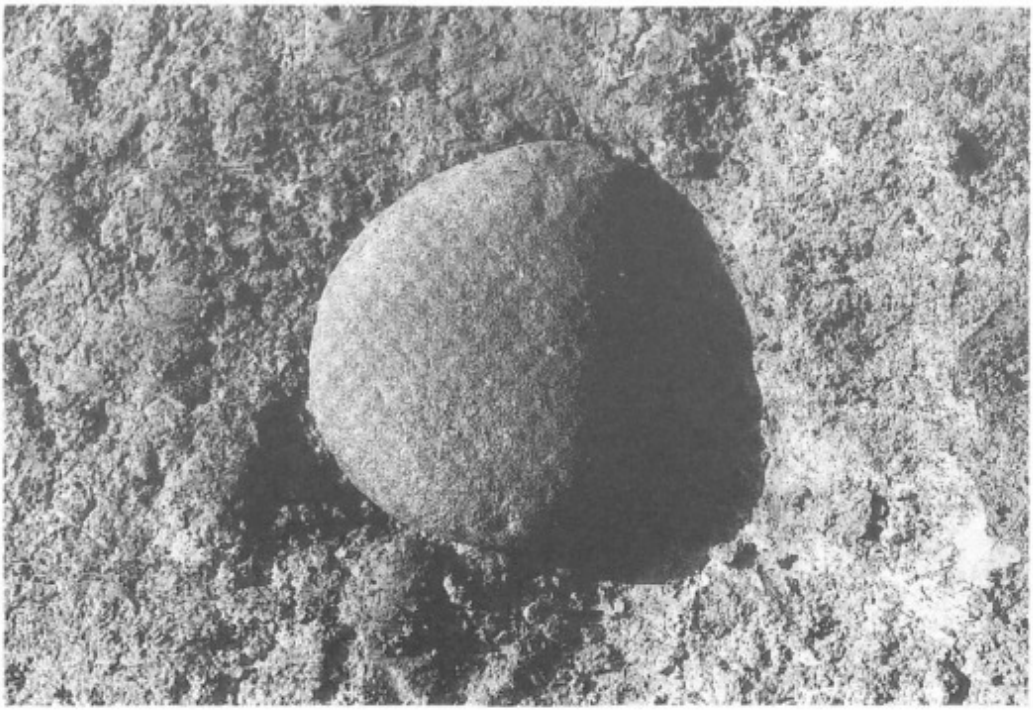


Aトレンチ南壁セクション

図版 3

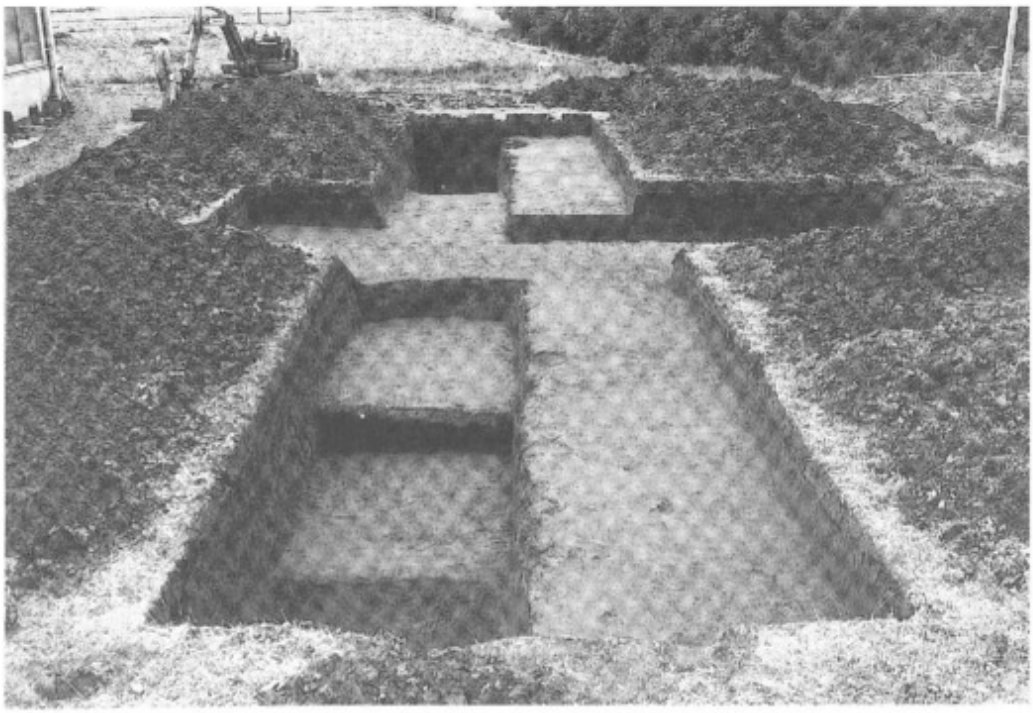


土層断面（第Ⅰ～Ⅴ層）

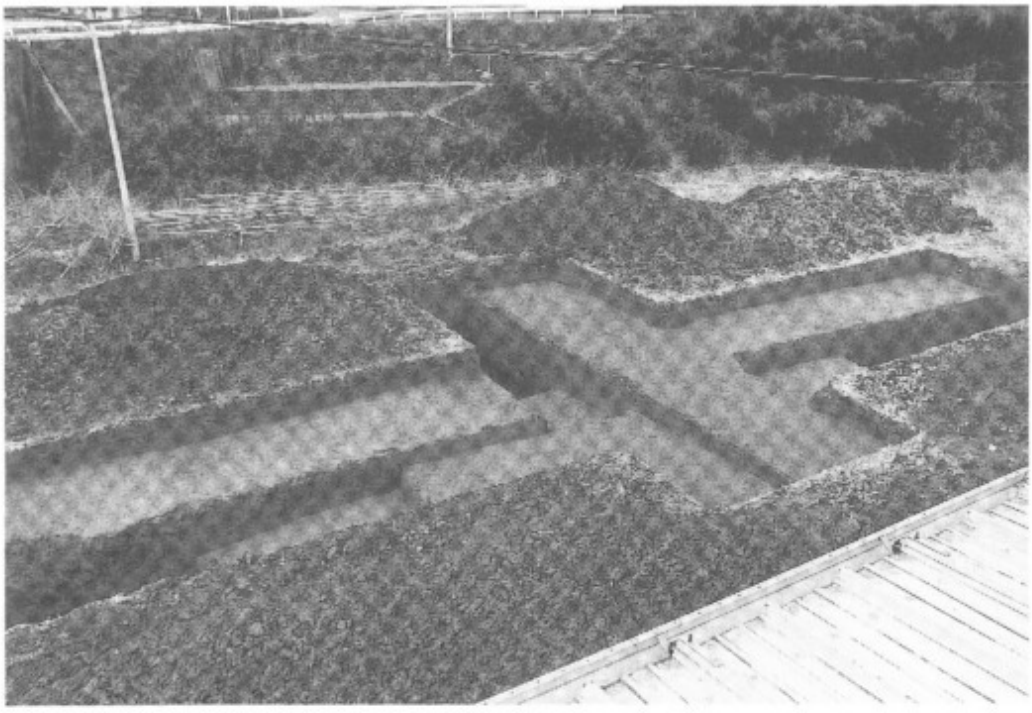


叩石出土状態

図版 4



試掘トレンチ全景（東より）



試掘トレンチ全景（南西より）

十和村埋蔵文化財発掘調査報告書第4集
高知県十和村
奈路遺跡
1993年3月
編集
発行　高知県十和村教育委員会
住所　高知県幡多郡十和村十川
印刷　西村謄写堂